島根大学ミュージアム年報

Annual Report of Shimane University Museum

平成19年度

2008.3

島根大学ミュージアム

Shimane University Museum

序　　文

平成19年10月より、前任の高安克己副学長の後を受けて、ミュージアム館長に就任しました。

ミュージアム創設２年目となる平成19年度は、11月に企画展示「学舎のお宝展」を開催し、島根大学が所蔵する様々な標本資料類などを一同に会して一般公開しました。幸い、1800名を超えるたくさんの学生・市民にご見学いただき、大変な好評を博すことができました。また、見学者からは、「島根大学にこんなにたくさんの見ごたえのある資料があるとは知らなかった。」「お宝は眠っていては意味がないので、今後もこうして公開してほしい。」「展示室がもっと広ければよかった。」「入口がわかりにくかった。」など、今後の期待や課題について様々なご意見・ご感想をいただきました。

また今年度は、本学の前身校のひとつ旧制松江高等学校に関係する唯一の建物である「島根大学旧奥谷宿舎（旧制松江高等学校外国人宿舎）」が、その歴史的価値を認められて国の登録有形文化財に登録されました。ミュージアムでは、今後の保存活用策をかためるうえで、建物に関わる様々な基礎調査をおこない、地域市民をはじめとする学内外の皆様にご参加いただいて２回のワークショップ（参加型学習会）を開催しました。こうした諸成果や皆様から賜ったご意見も、今後の建物の保存活用に役立ててまいりたいと思います。

独立行政法人化し、個性化・差別化が求められる昨今の国立大学にとって、大学ミュージアムがもつ役割と可能性は大きなものがあると確信しています。

まだ手探り状態で、多くの課題が山積しておりますが、「学ぼう！活かそう！伝えよう！しまだいのＤＮＡ」をキャッチフレーズにミュージアム活動のさらなる展開を考えております。皆様のご指導・ご教示を乞う次第です。

平成20年３月

島根大学ミュージアム館長　松　野　　煒

目　　次

Ⅰ　規則・組織
1　規則……1
(1) 島根大学ミュージアム規則
(2) 島根大学ミュージアム管理運営委員会規則
(3) 島根大学ミュージアム専門委員会内規
2　組織……4
(1) 組織構成と構成員
(2) 管理運営委員会
(3) 専門委員会
Ⅱ　活動報告
1　主な活動日誌抄……6
2　標本資料類等の収集、整理・保管、調査研究……7
(1) 標本資料類等の収集
(2) 標本資料類等の整理・保管
(3) 標本資料類等の調査研究
3　標本資料類等に関わる教育、普及啓発……7
(1) 入館者数
(2) 常設展示
(3) 企画展示
(4) 展示案内・キャンパスツアーなど
(5) 公開講座など
(6) 講義
4　博物館学教育……14
5　標本資料類等に関わる情報発信、地域貢献……14
(1) 刊行物の発行・配布
(2) 新聞連載
(3) インターネット
(4) 地域貢献活動
6　本学構内の埋蔵文化財の取扱い……15
(1) 島根大学構内遺跡第16次調査（京田地区４）
(2) 島根大学出雲キャンパス構内遺跡試掘調査
(3) 島根大学構内遺跡第14・15・16次調査、島根大学出雲キャンパス構内遺跡試掘調査の整理・研究
7　その他……19
(1) 島根大学旧奥谷宿舎保存活用検討ワーキンググループの活動
(2) 第10回大学博物館等協議会（第２回博物科学会）への参加
8　ミュージアム教員の活動記録……22
(1) 会下和宏
Ⅲ　島根県島根大学構内遺跡（第10次）出土試料の炭素14年代測定……23
Ⅳ　島根大学（松江キャンパス）周辺の歴史・文化資源について……30

Ⅰ　規則・組織

1　規則

(1) 島根大学ミュージアム規則

（平成18年島大規則第９号）
（平成18年３月８日制定）
〔平成19年２月28日一部改正〕

（趣旨）
第１条　この規則は、島根大学ミュージアム（以下「ミュージアム」という。）の組織及び運営に関し必要な事項を定めるものとする。
（目的）
第２条　ミュージアムは、学内共同教育研究施設として、島根大学（以下「本学」という。）における標本資料類等を大学所有の有形知的財産として位置づけ、それらを収集、整理・保管及び調査研究をしたうえで、展示公開等による教育、普及啓発、情報発信の促進及び地域貢献等を行うことを目的とする。
（業務）
第３条　ミュージアムは、次の各号に掲げる業務を行う。
一　標本資料類等の収集、整理・保管及び調査研究に関すること。
二　標本資料類等に関わる教育及び普及啓発に関すること。
三　博物館学教育に関すること。
四　標本資料類等に関わる情報発信の促進及び地域貢献に関すること。
五　本学構内の埋蔵文化財の取扱いに関すること。
六　その他ミュージアムの目的を達成するために必要な業務
（組織）
第４条　ミュージアムに、次の各号に掲げる職員を置く。
一　館長
二　副館長
三　専任教員
四　その他必要な職員
２　ミュージアムに兼任研究員及び学外協力研究員を置くことができる。
（館長）
第５条　館長の選考は、本学の専任教授のうちから、第10条に規定する島根大学ミュージアム管理運営委員会の発議に基づき、教育研究評議会の議を経て、学長が行う。
２　館長の任期は、２年とし、再任を妨げない。
３　館長は、ミュージアムの業務を掌理する。
（副館長）
第６条　副館長の選考は、本学の選任教員のうちから、第10条に規定する島根大学ミュージアム管理運営委員会の推薦に基づき、学長が行う。
２　副館長の任期は、２年とし、再任を妨げない。
３　副館長は、館長を補佐し、ミュージアムの業務を整理する。
（専任教員）
第７条　専任教員は、第３条に掲げられた事項に関し専門的知識又は相当な経験を有する者とする。
２　専任教員の選考は、教育研究評議会の議を経て学長が行う。
（兼任研究員）
第８条　兼任研究員は、ミュージアムの業務に関して専門的知識を有する者で、全学的立場から

ミュージアムの業務を推進する者とする。
2　兼任研究員は、本学専任教員のうちから、館長の推薦に基づき、学長が任命する。
3　館長は、前項の推薦に当たっては、当該教員が所属する部局等の長の同意を得るとともに、第10条に規定する島根大学ミュージアム管理運営委員会の議を経なければならない。
4　兼任研究員の任期は、2年とし、再任を妨げない。
（学外協力研究員）
第9条　学外協力研究員は、ミュージアムの業務に関して専門的知識を有する学外の者で、ミュージアムの業務推進に協力する者とする。
2　学外協力研究員は、第10条に規定する島根大学ミュージアム管理運営委員会の議を経て、館長が委嘱する。
3　学外協力研究員の任期は、2年とし、再任を妨げない。
（管理運営委員会）
第10条　ミュージアムに関する基本的事項を審議するため、島根大学ミュージアム管理運営委員会（以下「管理運営委員会」という。）を置く。
2　管理運営委員会に関し必要な事項は、別に定める。
（事務）
第11条　ミュージアムの事務は、財務部施設企画課、学術国際部社会・国際連携課及び学術国際部図書情報課の協力を得て、学術国際部研究協力課において処理する。
（雑則）
第12条　この規則に定めるもののほか、ミュージアムに関し必要な事項は、別に定める。
附　則
1　この規則は、平成18年4月1日から施行する。
2　島根大学埋蔵文化財調査研究センター規則（平成16年島大規則第162号）は、廃止する。
附　則
この規則は平成19年10月1日から施行する。

(2) 島根大学ミュージアム管理運営委員会規則

（平成18年島大規則第10号）
（平成18年3月8日制定）
〔平成19年2月28日一部改正〕

（趣旨）
第1条　この規則は、島根大学ミュージアム規則（平成18年島大規則第9号）第10条第2項の規定に基づき、島根大学ミュージアム管理運営委員会（以下「管理運営委員会」という。）の組織及び運営に関し必要な事項を定めるものとする。
（審議事項）
第2条　管理運営委員会は、島根大学ミュージアム（以下「ミュージアム」という。）に関し、次の各号に掲げる事項を審議する。
一　管理運営の基本方針及び事業計画に関すること。
二　本学構内の埋蔵文化財の取扱いに関すること。
三　館長及び副館長の推薦に関すること。
四　教員の人事（資格審査を含む）に関すること。
五　予算及び決算に関すること。
六　その他ミュージアムの管理運営に関すること。
（組織）
第3条　管理運営委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。
一　館長
二　副館長

三　ミュージアムの専任教員
四　各学部教員代表　各１名
五　附属図書館長
六　総合情報処理センター長
七　生涯学習教育研究センター長
２　第１項第４号の委員は、学部長の申出に基づき、学長が任命する。
３　第１項第４号の委員の任期は、２年とし、再任を妨げない。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。
４　管理運営委員会に委員長を置き、委員長は館長をもって充てる。
（会議）
第４条　管理運営委員会は、委員長が招集し、議長は委員長をもって充てる。
２　委員長に事故があるときは、副館長がその職務を代理する。
３　管理運営委員会は、委員の３分の２以上が出席しなければ会議を開くことができない。
４　管理運営委員会は、出席者の過半数をもって議決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
５　管理運営委員会が必要と認めたときは、管理運営委員会に委員以外の者の出席を求め、その意見を聴くことができる。
（専門委員会）
第５条　管理運営委員会に専門的事項を審議するため、必要に応じて、専門委員会を置くことができる。
２　専門委員会に関し必要な事項は、管理運営委員会が別に定める。
（事務）
第６条　管理運営委員会の事務は、財務部施設企画課、学術国際部社会・国際連携課及び学術国際部図書情報課の協力を得て、学術国際部研究協力課において処理する。
附　則
この規則は、平成18年４月１日から施行する。
附　則
この規則は平成19年10月１日から施行する。

(3) 島根大学ミュージアム専門委員会内規

（平成18年４月28日制定）

（趣旨）
第１条　島根大学ミュージアム管理運営委員会規則第５条第２項の規定に基づき、島根大学ミュージアム専門委員会（以下「専門委員会」という。）の組織及び運営に関し必要な事項を定めるものとする。
（専門委員会）
第２条　専門委員会に次の各委員会を置く。
一　埋蔵文化財専門委員会
・埋蔵文化財の発掘調査・試掘調査・確認調査・工事立会に係る基本計画に関すること。
・埋蔵文化財の修復保存に係る基本計画に関すること。
・その他埋蔵文化財に関する事項
二　普及啓発専門委員会
・シンポジウム、研究会、公開講座等の企画及び実施
・ニュースレター、広報等の編集・刊行
・その他普及啓発に関する事項
（組織）
第３条　専門委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

一　館長
二　副館長
三　ミュージアムの専任教員
四　ミュージアム兼任研究員のうちから若干名
2　第1項第4号の委員は、館長の推薦に基づき、学長が任命する。
3　第1項第4号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。
4　専門委員会に委員長を置き、委員長は館長をもって充てる。
（会議）
第4条　専門委員会は、委員長が招集し、議長は委員長をもって充てる。
2　委員長に事故があるときは、副館長がその職務を代理する。
附　則
1　この内規は、平成18年4月26日から施行する。
2　この内規施行後、実状に即して内規を変更することができる。

2　組織

(1) 組織構成と構成員

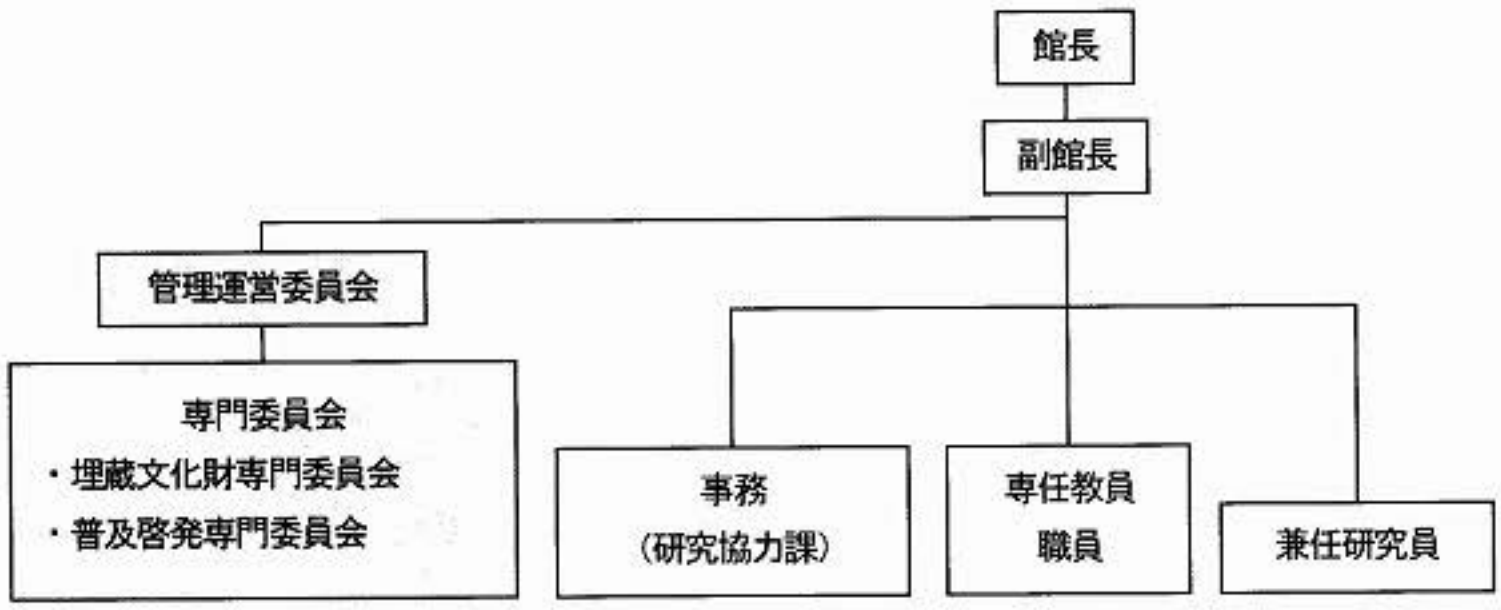


図5　ミュージアムの組織図

館　　長	学術国際担当副学長		髙安　克已	（平成19年9月30日まで）
	生物資源科学部	教　授	松野　　煒	（平成19年10月1日から）
副 館 長	法文学部	教　授	渡邊　貞幸	
専任教員		准教授	會下　和宏	
兼任研究員	法文学部	教　授	大橋　泰夫	
	法文学部	准教授	山田　康弘	
	法文学部	准教授	舩杉　力修	
	法文学部	准教授	小林　准士	
	法文学部	准教授	西田　　兼	
	教育学部	教　授	林　　正久	
	教育学部	教　授	大谷　修司	
	医学部	教　授	小林　裕太	
	総合理工学部	教　授	三瓶　良和	
	総合理工学部	准教授	酒井　哲弥	
	生物資源科学部	教　授	片桐　成夫	
	生物資源科学部	准教授	秋吉　英雄	
職　　員	研究協力課		高須　佳奈	

(2) 管理運営委員会

委員長	館長	学術国際担当副学長	髙安　克巳	(平成19年9月30日まで)
	館長	教　授	松野　　煒	(平成19年10月1日から)
委　員	副館長	教　授	渡邊　貞幸	
	専任教員	准教授	會下　和宏	
	法文学部	教　授	大日方克己	
	教育学部	教　授	相良　英輔	
	医学部	教　授	安井　幸彦	
	総合理工学部	教　授	横田修一郎	
	生物資源科学部	教　授	松野　　煒	(平成19年9月30日まで)
	生物資源科学部	教　授	北村　憲二	(平成19年10月1日から)
	附属図書館長	教　授	平川　正人	
	総合情報処理センター長	教　授	野田　哲夫	
	生涯学習教育研究センター長	教　授	堀口　　淳	

(3) 専門委員会

埋蔵文化財専門委員会

委員長	館長	学術国際担当副学長	髙安　克巳	(平成19年9月30日まで)
	館長	教　授	松野　　煒	(平成19年10月1日から)
委　員	副館長	教　授	渡邊　貞幸	
	専任教員	准教授	會下　和宏	
	法文学部	教　授	大橋　泰夫	
	法文学部	准教授	山田　康弘	
	教育学部	教　授	林　　正久	
	総合理工学部	教　授	三瓶　良和	
	総合理工学部	准教授	酒井　哲弥	
	生物資源科学部	教　授	片桐　成夫	

普及啓発専門委員会

委員長	館長	学術国際担当副学長	髙安　克巳	(平成19年9月30日まで)
	館長	教　授	松野　　煒	(平成19年10月1日から)
委　員	副館長	教　授	渡邊　貞幸	
	専任教員	准教授	會下　和宏	
	法文学部	准教授	舩杉　力修	
	法文学部	准教授	小林　准士	
	法文学部	准教授	西田　　兼	
	教育学部	教　授	林　　正久	
	教育学部	教　授	大谷　修司	
	医学部	教　授	小林　裕太	
	総合理工学部	教　授	三瓶　良和	
	総合理工学部	准教授	酒井　哲弥	
	生物資源科学部	准教授	秋吉　英雄	

Ⅱ　活動報告

1　主な活動日誌抄

平成19年４月12日　『島根大学コレクション2007』配布。
４月23日　ミュージアム管理運営委員会開催。
５月10日　キルギス国の留学生がミュージアム本館展示室見学。
６月２日　島根大学総合理工学部の授業でミュージアム本館展示室見学。
６月８日　第１回「島根大学旧奥谷宿舎（旧制松江高校外国人宿舎）の保存活用を考えるワークショップ」開催。
６月13日　米国・中国・韓国・インドネシアの留学生がミュージアム本館展示室見学。
６月16日　「出雲国まほろばガイドの会」30名がツアー見学。
６月24日　「嵩見団地」有志の皆さんがミュージアム本館展示室見学。
６月27日　授業の一環で留学生と城下町の町並み散策。
７月３～４日　国立大学法人等事務系職員就職候補者の皆さんが大学個別訪問でミュージアム本館展示室見学。
７月23日　松江市内高校の受験生がツアー見学。
７月23日　ミュージアム埋蔵文化財専門委員会開催。
７月24日　ミュージアム管理運営委員会開催。
７月26日　附属小学校の児童・保護者18名がツアー見学。
７月31日　附属小学校の児童・保護者35名がツアー見学。
８月４～５日　「夏休み・子どもミュージアム体験教室」開催。
８月６日～９月６日　島根大学総合研究棟改修に伴う島根大学構内遺跡発掘調査実施。
８月11日　島根大学教育支援センター主催「島大ピピットひろば」で91名の児童がミュージアム本館展示室見学。
８月23・24日　親子でめぐる「夏休み・しまだい探検2007」開催。
８月31日　松江養護学校の生徒がミュージアム本館展示室見学。
９月26日　第２回「島根大学旧奥谷宿舎（旧制松江高校外国人宿舎）の保存活用を考えるワークショップ」開催。
10月６日　ホームカミングデーでキャンパスツアー実施。
10月６～８日　大学祭で125名がミュージアム本館展示室見学。
10月11日　ミュージアム埋蔵文化財専門委員会開催。
10月30日　ミュージアム管理運営委員会開催。
10月12日～２月１日　特別講義「島大ミュージアム学」開講。
10月13日　放送大学「大学間交流講座～島根大学に遊ぶ～」で受講生がツアー見学。
11月１日　ミュージアム普及啓発専門委員会開催。
11月２日　「学舎のお宝展」内覧会開催。
11月５～30日　企画展示「学舎のお宝展」開催。
11月７日　米子西高校ＰＴＡ40名が「学舎のお宝展」見学。
11月９日　「島大ミュージアム学」受講生約250名が「学舎のお宝展」見学。
11月９日　松江市長が「学舎のお宝展」見学。
11月10・17日　公開講座「島根まるごとミュージアム体験ツアー」実施。
11月14日　倉吉東高校ＰＴＡ18名が「学舎のお宝展」見学。
11月15日　大社高校の生徒49名が「学舎のお宝展」見学。
11月18日　斐川西中学校・科学クラブの生徒・先生８名がツアー見学。
11月19日　大社コミュニティセンター18名がツアー見学。
11月19日　故中山勝博島根大学助教授のお名前が付けられた新発見・類人猿化石を特別展示。
12月22日　「冬休み・子どもミュージアム体験教室」開催。
平成20年１月14日　携帯版ホームページ開設。
１月21～25日　島根大学出雲キャンパス試掘調査実施。
２月26日　國學院大學文学部の生徒・先生30名がツアー見学。
３月14日　荒神谷ボランティアガイドの会20名がツアー見学。

3月17日　大社秋葉会20名がツアー見学。
3月22日　「春休み・子どもミュージアム体験教室」開催。
3月28日　境高校の生徒・先生22名がツアー見学。

「夏休み・子どもミュージアム体験教室」で化石クリーニング（8/5）

「冬休み・子どもミュージアム体験教室」で人工雪作り（12/22）

2　標本資料類等の収集・整理・保管・調査研究

(1) 標本資料類等の収集

学内他部局から下記資料の移管を受けた。

資料名	受入元	数量	備考
化石標本	高安克己	多数	良好。整理中。

この他、総合研究棟・教育学部棟改修に伴って廃棄されていた岩石標本、地形模型等の教材を収集した。

また、開学記念室に保管されてある本学や前身校に関する古写真のデジタル化作業を進めた。

(2) 標本資料類等の整理・保管

島根大学構内遺跡出土遺物や上記標本類等のミュージアム所蔵資料は、ミュージアム本館の建物内収蔵部屋において適切な環境のもとに整理・保管している。しかし、既に飽和状態であり、将来的に別の収蔵室確保が必要な状況となっている。

(3) 標本資料類等の調査研究

①島根大学構内遺跡出土遺物の研究

「Ⅱ-6　本学構内の埋蔵文化財の取扱い」で後述する。

②島根大学及び前身校に関する資料調査

事務局が所蔵する本学や前身校の写真、行政文書等を収集し、特に、島根大学旧奥谷宿舎（旧制松江高等学校外国人宿舎）や本学に在籍していた過去の著名な教官等について調査した。

3　標本資料類等に関わる教育、普及啓発

(1) 入館者数

学内の展示施設のうち、ミュージアム本館（ミュージアム管轄）と山陰地域・汽水域資料展示室（汽水域研究センター管轄）の入館者数は下表の通りである。

11月は、企画展示を山陰地域・汽水域資料展示室で開催し、その間、展示しない標本資料をミュージアム本館内に仮置きしたため、本館展示室を閉鎖した。

冬季は、学外団体客が減少する傾向がみられる。また、学生等の入館者が少ないように見受け

られるため、次年度以降、さらに広報・周知をはかり、1ヶ月あたりコンスタントに100人以上の入館者数確保を目指したい。

平成19年度の入館者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
ミュージアム本館	44	40	106	126	162	16	164	−	5	5	43	109	820
山陰地域・汽水域資料展示室	13	9	41	65	81	9	56	1825	0	0	32	74	2205
計	57	49	147	191	243	25	220	1825	5	5	75	183	3025

(2) 常設展示

島根大学ミュージアムは、学内にある様々な展示施設・資料を「まるごとミュージアム」として位置付け、総称したものである。主な展示施設・内容は以下の通りである。

①松江キャンパス

島根大学ミュージアム本館

島根大学ミュージアムのコア施設である。島根大学のキャンパス内は、大学ミュージアム（平成6～17年度は埋蔵文化財調査研究センター）によって、永年にわたり発掘調査がおこなわれており、主に、こうした島大キャンパス出土の考古資料を展示している。また、本館には、ミュージアム職員が常駐し、島根大学ミュージアムの総合案内、情報発信等を行っている。

■月～金・午前9時～午後5時開館。開館時間内は自由に見学できる。事前に予約すれば、祝休日でも開館。

正門門柱（国登録文化財）

1924（大正13）年3月建造。松江市忌部産の花崗岩（白御影石）製の正門柱2、脇門柱2からなる。旧制松江高等学校の正門として制作・使用された後、島根大学の正門として受け継がれた。2007（平成19）年5月、国登録文化財に登録された。

「総合理工学部」研究紹介コーナー（総合理工学部3号館1階ロビー）

総合理工学部の教育研究内容や所蔵標本の一部が展示してある。

■月～金・午前8時30分～午後5時開館。開館時間内は自由に見学できる。

ミニ学術植物園「みのりの小道」（生物資源科学部棟周辺）

生物資源科学部によって運営されている、くつろぎながら学べる植物園。花壇などのほか、研究成果や豆知識などを説明したパネルを配置。整備作業には、学生や地域市民も参加している。

■年中無休。自由に見学できる。

「古代出雲文化資料調査室」展示室（ミュージアム本館北隣）

法文学部考古学研究室が所蔵する考古資料の一部を展示している。1953（昭和28）年、文理学部の一室に設けられた標本室が、1978（昭和53）年、法文学部歴史学陳列室となり、2005（平成17）年3月、「古代出雲文化資料調査室」2階に移設された。膨大な量の収蔵資料は、故山本清名誉教授によって収集されたものや旧制松江高等学校に保管されていたものなどからなり、日本の考古学を研究するうえで大変、貴重なものが多く含まれている。

■普段は閉館しているが、見学希望者は、ミュージアム本館の職員に申し込めば開館する。

山陰地域・汽水域資料展示室（汽水域研究センター1階内）

汽水域研究センターの前身である山陰地域研究総合センターが中心となり、昭和62年10月に「山陰地域研究総合センター資料展示室」が開設された。本展示室は、平成4年4月に汽水域研究センターが設置されたことに伴い、これを引き継いだものである。動物標本、化石・岩石標本、考古資料など、山陰地域・汽水域に関わる様々な分野の資料が総合的に展示してある。

■月～金・午前9時～午後4時開館。見学希望者は、ミュージアム本館の職員か汽水域研究センター事務室の職員に申し込めば対応。予約不要。

「同窓会連合会」展示コーナー（附属図書館１階内）

島根大学や前身校である松江高等学校・島根師範学校・島根農科大学などの学校史に関わる写真・資料などが展示してある。

■月～金・午前10時～午後３時開館。開館時間内は自由に見学できる。

附属図書館本館

附属図書館本館には、一般の蔵書のほか、膨大な量の古文書、絵図、貴重資料などが所蔵されている。正面入口を入って左側にミニ展示コーナーがあるほか、３階に小泉八雲関係の書籍・パネルを展示した「八雲文庫」が設けてある。

■開館時間　月～金：午前８時30分～午後９時30分（授業のない期間は午前９時～午後５時）
　　土・日・祝休日：午前10時～午後５時30分（授業のない期間は休館）

■休館日　授業のない期間の土・日・祝休日、定例図書整理日（偶数月第４水曜日）
　　年末年始（12月29日～１月４日）、特別整理期間（８月中旬及び３月下旬）

「菅田ヶ丘古墳」移築展示

第２食堂の横には、移築復元された「菅田ヶ丘古墳」がある。もともとは、ここから西方約50ｍの丘の上にあった、長さ約30ｍ・高さ約3.5ｍの古墳。５世紀後半頃につくられたと考えられている。

■年中無休。自由に見学できる。

②出雲キャンパス

附属図書館医学分館

附属図書館医学分館には、一般の蔵書のほか、大森文庫、古医書、明治以前の医療器具などがある。このうち、２階閲覧室前廊下には、華岡青洲の業績、大森不明堂三楽が学んだ華岡流医術、不明堂の医学塾生活、地元母里藩に帰国後の大森家の診療など、10枚のパネルで、大森文庫の内容を概観することができる。

■開館時間　月～金：午前９時～午後８時、土・日・祝休日：午前10時～午後４時

■休館日　年末年始（12月28日～１月４日）その他分館長が認めた日

平野勲画伯ギャラリー（附属病院総合ホール内）

附属病院総合ホールの一角にて、地元出雲市の出身で、ふるさとのまつり・郷土芸能を描き続ける著名な漫画家・平野勲画伯の作品を展示。

（3）企画展示「学舎のお宝展～学ぼう！活かそう！伝えよう！島根大学コレクション～」

展示の目的・企画

島根大学は、明治８年「小学教員伝習所」、大正９年「松江高等学校」、大正10年「県立益田農林学校」、昭和50年「島根医科大学」などの流れをくむ総合大学である。こうした永い歴史のなかで収集されてきた、様々な標本資料類は、高い学術価値をもつとともに、本学の地域に根ざした教育・研究活動の歴史を視覚的に示す証人でもある。

本企画展示では、明治時代以来、本学が永年の教育・研究活動の過程で収集してきた、これらの標本資料類を一堂に会して学内外の方々に公開し、本学の学問やその伝統に対して理解を深めてもらうことを目的とした。さらには、これを通して、本学や地域の自然・文化に対する誇り・愛着が醸成されることを期待した。

会期・会場ほか

会期は、平成19年11月５日（月）～11月30日（金）。土日祝日も開館。開館時間は午前９：00～午後４：30。

会場は、島根大学汽水域研究センターの島根大学山陰地域・汽水域資料展示室（島根大学総合研究棟１階）を借りた。

入場無料。会期中は、学生による展示解説ボランティアが２名常駐し、展示解説、案内などをおこなった。

展示資料の概要

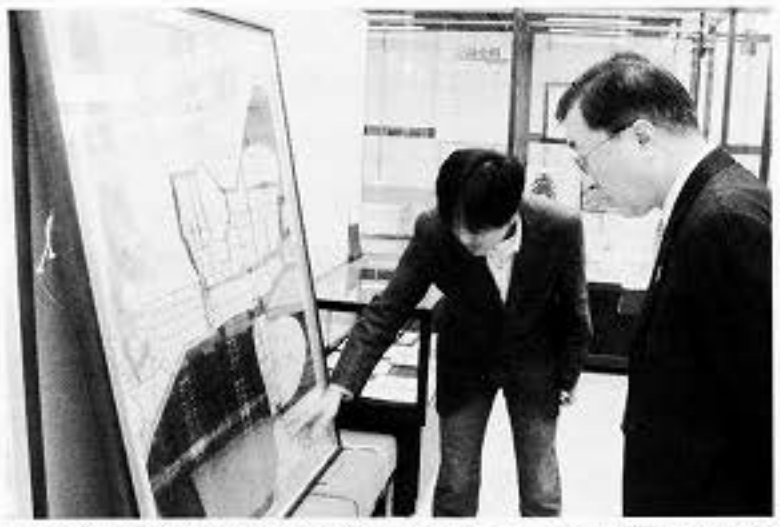
総合大学である島根大学が所蔵するコレクションは、多様な学問分野にわたるため、大きく以下の９分野に整理し、大テーマとして展示配置した。展示資料は約600点以上になった。

・動物（明治時代のチョウザメ、絶滅したオキウマ・ニホンアシカ、アオウミガメ標本、医学部収集寄生虫標本など）
・昆虫（生物資源科学部収集の地域に根ざした世界的昆虫標本）
・植物・藻類（演習林など収集のさく葉標本、県立農科大学収集の樹木標本）
・化石（故中山勝博先生のお名前がつけられた新発見類人猿化石、島大生が制作したパレオパラドキシアなど）
・鉱物・岩石（南極の石、総合理工学部収集の鉱物、島大生が発見した鉱物など）
・考古資料（法文学部が発掘した考古資料、キャンパスから出土した土器・木器など）
・記録史料（松江城下町絵図＜堀尾期＞、シーボルトや小泉八雲直筆賞状・書簡、大森文庫など）
・技術史関連資料（世界のカンナ）
・旧制松江高等学校・旧奥谷宿舎（外国人宿舎）に関する資料（当時の写真・公文書など）

展示の様子

遅くまで展示準備におわれる学生・スタッフ（10/31）

留学生も見学（11/5）



「松江城下町絵図＜堀尾期＞」を見学される松江市長（11/9）

熱心に見学する大社高校生徒（11/15）

成果と反省点

見学者数は、のべ1,825名を数えた。このうち、見学者分析のための展示アンケートに回答してもらったのは、362名。

アンケート結果をみると、見学者の居住域は、松江市内273名（75%）／松江市外79名（22%）と、市内が多いものの市外からも比較的足を運んでいただいたことが分かる。

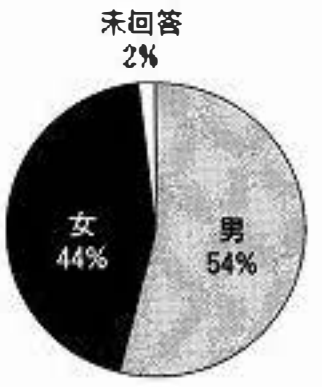
性別は、男性195名（54%）／女性161名（44%）とほぼ半々、年齢層は、小学生７名（２%）／中学生２名（１%）／高校生５名（１%）／大学生177名（49%）／社会人で20～30代36名（10%）／40～50代74名（21%）／60代以上56名（16%）。学内の大学生が半数を占めたのは当然だが、地域の多くの方々にも見学してもらったことは満足できる結果であった。これに対し、小中学生の見学者は、課外活動の一環としての団体見学はあったが、個人の自発的な見学が少なく、

今後の課題となった。

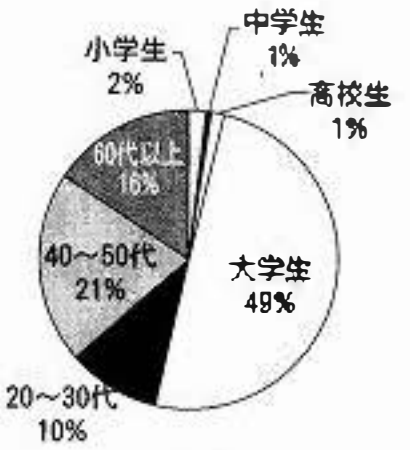
展示会を知ったきっかけ（複数回答可）は、人から聞いた（クチコミ）86名（22%）、大学の授業で聞いた89名（23%）、チラシ・ポスターで知った99名（26%）、新聞・テレビ（マスコミ）で知った52名（13%）、ホームページで知った10名（3%）、通りがかり32名（8%）、その他13名（3%）。様々なメディアを通じて展示会の情報を得ていることが認められ、今後とも多様で複合的な手段による広報が必要であるといえる。また、偶然通りがかり、入場した見学者もいたことから、今後可能であれば、より人通りの多い、分かりやすい場所に展示会場を選定することが望ましいといえる。

見学者からは、「島根大学にこんなにたくさんの見ごたえのある資料があるとは知らなかった。」「お宝は眠っていては意味がないので今後もこうして公開してほしい。」「展示室がもっと広ければよかった。」「入口がわかりにくかった。」など、今後の期待や課題について様々な意見・感想をいただいた。島根大学ミュージアムとしては、こうした意見を真摯に受けとめ、今後学内に一定規模の常設的展示室を何とか確保して、より充実した展示活動を展開していけたらと構想している。

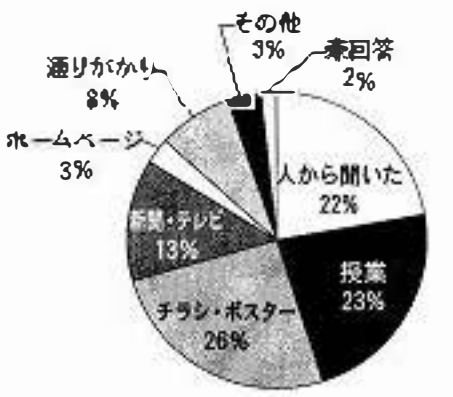
居住域



性別



年齢



きっかけ

(4) 展示案内・キャンパスツアーなど

●展示案内

ミュージアム本館に来館した見学者に分かりやすく展示解説したり、別の場所にある展示施設に誘導・案内したりした。

②キャンパスツアー

地域市民、学校、学内教職員等から予約をうけて、下記の●～⑧基本コースを中心に、学内の展示施設等を解説しながら案内した。主な実施状況は「Ⅱ-1　主な活動の日誌抄」に記してある。

●旧制松江高校～島根大学正門の門柱（国登録文化財）
②総合理工学部3号館1F研究紹介コーナー・3号館高層階からキャンパスや市街地を展望
③ミュージアム本館
●古代出雲文化資料調査室
●みのりの小道（ミニ学術植物園）
●汽水域研究センター「山陰地域・汽水域資料展示室」
●菅田ヶ丘古墳（移築復元）
⑧附属図書館、同窓会連合会展示コーナー

③「夏休み・しまだい探検」

日時　平成19年8月23日・24日

内容　展示施設・附属図書館等を親子で見学するキャンパスツアー。標本にさわったり、クイズに答えたりして、楽しく大学の空気にふれてもらった。附属図書館では、通常見学できない貴重資料を展示した。平成18年度文部科学省「子ども霞が関見学デー」と同時期に開催される取組の一環として開催。

（5）公開講座など

①公開講座「島根まるごとミュージアム体験ツアー」

日時　平成19年11月10日（土）、11月17日（土）　２回

共催　県立古代出雲歴史博物館

内容

第１回：島根大学ミュージアム企画展「学舎のお宝展」を展示担当の専任教員が展示解説。

第２回：バスで県立古代出雲歴史博物館を訪ね、展示担当の専門学芸員が展示解説。企画展「弥生王墓誕生」を中心に見学。

受講登録者数は24名。分かりやすい展示解説を聞きながら見学できたということで、大変好評だった。

②親子体験講座「親子で学ぶ夏休み子供ミュージアム体験教室」

日時　平成19年８月４日（土）、８月５日（日）２回

内容

第１回は、島根大学ミュージアム本館の縄文土器展示を見学した後、島根大学構内遺跡から出土した縄文土器の拓本とり。作業を通して、縄文土器をよく観察し、文様の種類や文様のつけ方を学ばせた。とった拓本は、記念に持ち帰り。第２回は、島根県内で見つかった化石を、道具を用いてクリーニング。化石の周りの余分な石を取り除く作業を通して、化石にふれあい、化石の種類や時代、当時の環境について学ばせた。クリーニングした化石は、記念に持ち帰り。作業後、島根大学山陰地域・汽水域資料展示室の化石展示を見学。参加者はのべ25名。

③親子体験講座「親子で学ぶ冬休み子供ミュージアム体験教室」

日時　平成19年12月22日（土）

協力　島根大学生物資源科学部

後援　松江市教育委員会

内容　子供のための科学実験講座（①人工雪をつくってみよう、②きれいな葉脈標本でクリスマスカードをつくろう）。科学原理を応用して、身近な素材から作品を制作。完成品は記念に持ち帰り。参加者は30名以上。

④親子体験講座「親子で学ぶ春休み子供ミュージアム体験教室」

日時　平成20年３月22日（土）

協力　島根大学総合理工学部

後援　松江市教育委員会

内容　子供のための科学実験講座（①光を学んで操ろう！科学マジック工作、②石だってこんなにきれい！ペットボトル偏光顕微鏡を作ろう）。科学原理を応用して、身近な素材から作品を制作。完成品は記念に持ち帰り。参加者は30名以上。

「夏休み・子どもミュージアム体験教室」で化石クリーニング（8/5）

「冬休み・子どもミュージアム体験教室」で人工雪作り（12/22）

(6) 講義（島大ミュージアム学）

ミュージアムが開講する授業として、後期に特別講義「島大ミュージアム学」を公開授業として実施した。概要は以下の通りである。

授業科目名　「島大ミュージアム学～島根大学と島根県の自然・歴史・ひと・文化～」

授業の目的　島根大学で学ぶ学生は、県内外の出身地を問わず、島根県の自然・歴史・文化や本学の学校史、顕著な業績をあげた教官・卒業生などについての知識が希薄であるように見受けられる。そこで、本授業では、「ミュージアム」「フィールド」「モノ」をキーワードにして、島根県の自然・歴史・文化や島根大学の学校史・著名人などの基礎的事項について、学際的に学ぶものとする。あわせて、公開授業として地域市民にも聴講してもらう。

達成目標　島根県・島根大学について、広い基礎知識を得てもらうようにする。本授業を通して、学生や地域市民のなかに、島根県や本学に対する誇り・愛着が醸成されることを期待する。

科　　目　共通教養科目　選択

対　　象　1年次以上、市民

単 位 数　2単位

曜日・時間　金曜日　2コマ目（10：15～11：45）

担当教員

会下和宏（島根大学ミュージアム准教授）
高安克己（島根大学学術国際担当副学長）
枚村喜則（島根大学元助教授）
松尾　寿（島根大学名誉教授）
小泉　凡（島根女子短期大学准教授）

講義内容

日程	講義内容	講師
10月12日（金）	1．島大ミュージアム学ガイダンス	会下和宏
10月19日（金）	2．発掘でわかった出雲地域の古環境	会下和宏
10月26日（金）	3．島根県の自然～植生を中心に～	枚村喜則
11月2日（金）	4．遺跡のうえの島大キャンパス	会下和宏
11月9日（金）	5．島根大学所蔵コレクション概説～ミュージアム企画展示「学舎のお宝展」の見学～	会下和宏
1月16日（金）	6．島根大学周辺の遺跡・史跡	会下和宏
11月22日（金）	7．島根県の歴史・偉人	会下和宏
11月30日（金）	8．出雲の護符とオックスフォードの博物館	小泉　凡
12月7日（金）	9．島根大学史と島根県の近代高等教育～島大の前身校から国立島根大学まで～	会下和宏
12月14日（金）	10．松江城下町の歴史～城下町松江の誕生と町の構造～	松尾　寿
12月21日（金）	11．島根大学の著名人～わが校の先人たちとその学問～	会下和宏
1月11日（金）	12．「島大ミュージアム検定」練習問題を解く	会下和宏
1月16日（水）	13．大学博物館と島大ミュージアム	高安克己
1月25日（金）	14．休講	－
2月1日（金）	15．試験	－

受講登録者数は、学生291名、一般市民2名である。

受講者からは、「島根県には豊富な自然・歴史資源があること、島根大学が永い歴史をもつ伝統校であり多くの著名人を輩出していること、キャンパス内に古墳があること、学内に様々な標本資料が所蔵されていること、島根大学キャンパスが遺跡のうえに立地していること等を知り、驚いた、興味深かった…」等の感想がよせられた。

本年度は受講生が多すぎて学外でのフィールド見学ができなかったため、来年度は、受講対象学生を1～2年生に限定したい。来年度の授業では、キャンパス内だけではなく、キャンパス周辺の古墳・城下町・里山等の見学も積極的に取り入れて、より充実した教育プログラムを開発していきたいと考えている。

4　博物館学教育

ミュージアム専任教員の会下和宏が、学芸員資格取得に必要な以下の授業を担当した。

・「博物館学資料論」「博物館学情報論」「博物館学経営論」（法文学部開講）
・「考古学実習Ⅲ」（法文学部開講）

また、総合理工学部・生物資源科学部で開講している学芸員資格取得に必要な授業の非常勤講師控え室として、ミュージアム本館を提供し、あわせて授業準備等のサポートも行った。

また、10月22日～11月２日、博物館実習生６名を受け入れ、実習を実施した。

5　標本資料類等に関わる情報発信、地域貢献

(1) 刊行物の発行・配布

①当館及び本学の刊行物

下記の既刊・新刊刊行物を学内や学外関係諸機関、学校、県内観光施設等に配布した。

・携帯用パンフレット『島根大学ミュージアム』…ミュージアム展示を紹介。（Ａ４サイズ・３つ折、平成18年度発行）
・パンフレット『学舎の履歴書～島根大学（松江キャンパス）と周辺の歴史～』…松江キャンパス内や周辺の遺跡等を紹介。（平成18年度発行）
・図録『島根大学コレクション2007』（平成18年度発行）
・ニュースレター『SHIMADAI MUSE』Vol.2（Ａ４サイズ・４ページ）
・『島根大学ミュージアム年報～平成19年度』

②当館及び本学所蔵資料が紹介・掲載された他組織の刊行物

・『生コン島根』第100号、島根県生コンクリート工業組合、2007年…島根大学ミュージアムの紹介。

(2) 新聞連載

平成18年度から連載していた島根大学コレクションを紹介する「学舎のお宝」（山陰中央新報）を継続して第47～50回分、編集した。今年度分の連載内容は下記の通り。

	資料名	分野	所蔵部局・研究室等	執筆者	掲載日
47	コスモクロア	自　然	総合理工学部地球資源環境学科岩石試料室	高須晃（総合理工学部）	19. 4. 7
48	菅田ヶ丘古墳出土品	考　古	法文学部考古学研究室	渡辺貞幸（法文学部）	19. 4.14
49	島根大学旧奥谷宿舎（旧制松江高等学校外国人宿舎）	その他		会下和宏（ミュージアム）	19. 4.21
50	オホーツクアイト	自　然	総合理工学部地球資源環境学科岩石試料室	赤坂正秀（総合理工学部）	19. 4.28

(3) インターネット

島根大学ミュージアムのホームページ（http://museum.shimane-u.ac.jp/）を随時更新した。

インターネット企画展示「写真でみる島根大学の歴史」と題したページでは、デジタル化した島根大学文理学部の校舎・学生等の写真を用いて、本学の歴史を分かりやすく解説した。

(4) 地域貢献活動

「３　標本資料類等に関わる教育、普及啓発」で前述した「(4) 展示案内・キャンパスツアーなど」「(5) 公開講座など」は、主に地域市民が対象であることから、地域貢献活動にも含まれる。

6　本学構内の埋蔵文化財の取扱い

（1）島根大学構内遺跡第16次調査（京田地区４）

①調査場所　島根県松江市西川津町1060（旧字名：京田、図２）
②調 査 名　島根大学構内遺跡第16次調査（京田地区４）
③調査略号　07Ｓ－16
④調査機関　島根大学ミュージアム
⑤調査原因　総合研究棟改修工事
⑥調査面積　約185㎡
⑦調査期間　2007年８月６日～９月10日
⑧調査成果

（校舎北側トレンチ）

調査経過

2007年８月20日　近現代盛土重機掘削。
８月21～24日　第１～３層掘り下げ。
８月25日　自然材出土状況の掃除・写真。
８月30～９月１日　断面図作製など。
９月３日　現地検討会。

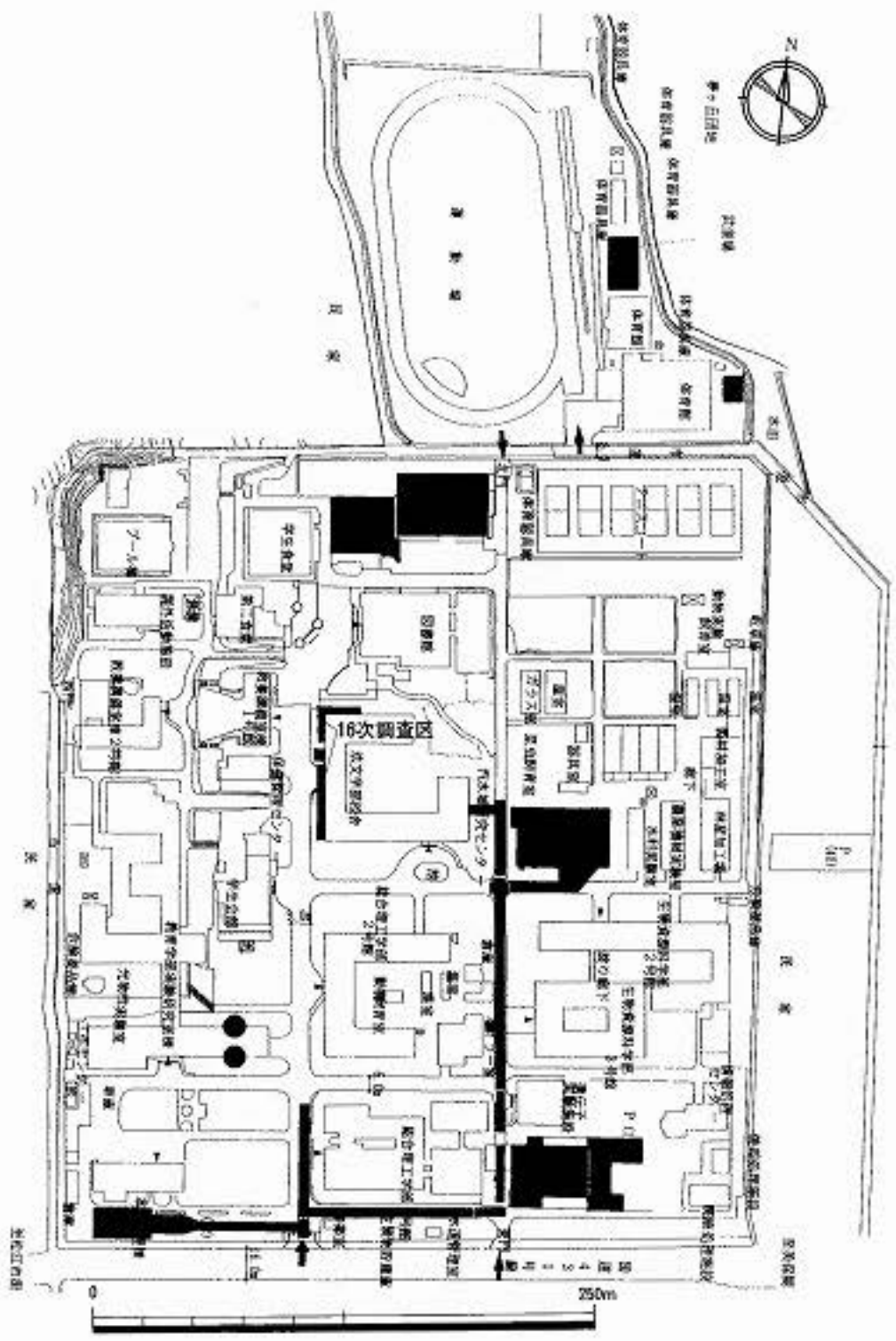


図２　島根大学構内遺跡第16次調査位置図（1/5,000）

9月4～5日　第3層掘り下げ。北壁断面写真・断面図作製など。土壌サンプル採取。
9月6日　トレンチ東側（A3グリッド）の重機による第3層掘り下げ。基盤層確認。
9月10日　補足調査。

基本層序（図3）

層名	層相	標高	時代・遺物
第1層	灰色粘土（水田耕作土・盛土）	+1.3～2.1m	近代／陶磁器・須恵器（古墳時代頃）
第2a層	灰オリーブ色粘土	+0.9～1.3m	
第2a層中砂層	暗緑灰色粗砂など	+0.9～1.3m	
第2b層	暗灰黄色粘土	+1.0～1.5m	
第3a～c層	オリーブ黒色泥土・黒色泥土・黒褐色粘土（海成層）	～+1.0m	縄文前期～（縄文海進時か）／自然礫・自然材
第4層	灰色粘土	～1.2m	基盤層（松江層）

（校舎西側1トレンチ）

調査経過

8月25～30日　第1～2層掘り下げ。基盤層上面検出。
8月31日　掃除。完掘状況全景・西壁断面写真（南から）
9月1日　掃除。完掘状況など写真（トレンチ北端部）
9月3日　現地検討会。西壁断面図作製。

基本層序

層名	層相	標高	時代・遺物
第1a層	灰色粘土（水田耕作土・盛土）	+1.5～2.1m	近代／陶磁器・須恵器（奈良時代）
第2a層	暗オリーブ色粘土	+1.3～1.7m	炭化物・土師器
第2b層	暗灰黄色粘土	+1.2～1.4m	
第4層	灰色粘土	～1.2m	基盤層（松江層）

（校舎西側2トレンチ）

調査経過

2007年8月6日　トレンチ中央部の近現代盛土重機掘削
8月7～8日　トレンチ中央部の第1～3層掘り下げ
8月9日　トレンチ中央部の基盤層上面検出。掃除・写真
8月10～11日　トレンチ中央部の西壁断面図作製。
8月10日　トレンチ南部の近現代盛土重機掘削。
8月10～16日　トレンチ南部の第1～3層掘り下げ。基盤層検出。
8月17日　トレンチ南部の基盤層上面検出。掃除・写真。西壁断面図作製。土壌サンプル採取。
8月18日　トレンチ最南部の掘り下げ。掃除・写真。西壁断面図作製。
9月1日　トレンチ北部の近現代盛土重機掘削。第1層掘り下げ。
9月3日　トレンチ北部の第2層掘り下げ。
9月4日　トレンチ北部の掃除・完掘状況写真・西壁断面写真。西壁断面図作製。

基本層序

層名	層相	標高	時代・遺物
第1a層	灰色粘土（水田耕作土・盛土）	+1.4～2.0m	近代／陶磁器
第1b層	オリーブ黒色粘土（水田耕作土）	+1.3～1.4m	近代／陶磁器
第2a層	暗オリーブ色粘土	+0.9～1.8m	
第3層	オリーブ黒色シルト（海成層）	+0.7～+1.0	縄文前期～（縄文海進時か）／縄文土器・自然礫
第4層	灰色粘土	～1.1m	基盤層（松江層）

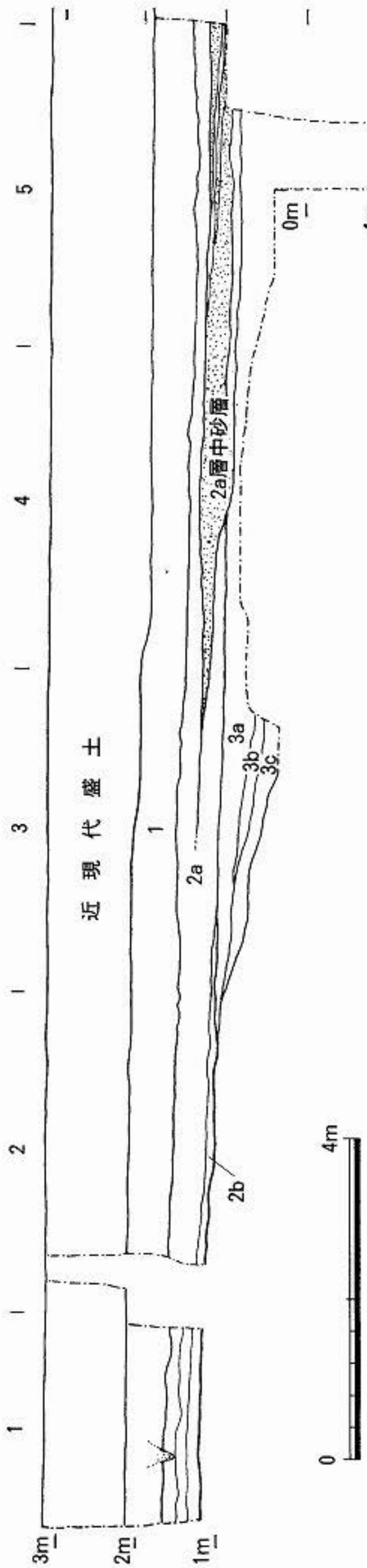


図3　島根大学構内遺跡第16次調査区　（校舎北側トレンチ）北壁断面図（1/80）

⑨特記事項

・「菅田丘陵」の東側裾部の旧地形を復元する資料が得られた。特に、標高＋1.2m付近で検出した緩やかなテラス面は、縄文海進高頂期に形成された波蝕台の可能性がある。同様の地形は、第11次調査区（現学生会館）でも検出しており、これを追認する資料が得られた。

（2）島根大学出雲キャンパス構内遺跡試掘調査

①調査場所　島根県出雲市塩冶町89-1　（図４）

②調査機関　島根大学ミュージアム

③調査期間　平成20年１月21～25日

④調査目的

島根大学ミュージアムでは、出雲キャンパスにおける埋蔵文化財の内容について明らかにするため、これまで数次の試掘調査を実施してきた。

また、平成19年３月には、医学部附属病院新病棟建設（平成20年度から施工予定）に備えて、当該地の埋蔵文化財有無を確認するため試掘調査を実施した。しかし調査地区は、まず３ｍ以上もの現代盛土を排除しなければならず、本来埋蔵文化財の調査対象となる堆積層を下位まで充分精査したとはいえない状況であった。

そこで、今次試掘調査では、調査面積を拡張して、より下位層まで遺構・遺物の有無を確認するものである。

⑤調査成果

調査経過

平成20年１月21日　現代盛土の重機掘削。

平成20年１月21～23日　第１～２層掘り下げ。

平成20年１月22～24日　北壁断面写真撮影。北壁断面図作製。

平成20年１月24日　第２ｃ層の重機による掘り下げ。

平成20年１月25日　島根大学ミュージアム埋蔵文化財専門委員会委員による現地検討会（島根大学ミュージアム埋蔵文化財専門委員会）開催。

基本層位

層位	層相	標高（m）	遺物	堆積時期
現代盛土		+6.8～9.8		昭和50年頃
第１層 （大学造成前水田耕作土・盛土）	黒褐色粘土 暗オリーブ褐色粘土 オリーブ黒色粘土	+6.4～6.8	土師器、陶磁器	近世？～近代
第２ａ層	オリーブ黒色シルト （細砂挟在）	+6.2～6.4	なし	不明
第２ｂ層	灰オリーブ色シルト。植物生痕あり。	+6.1～6.2	なし	不明
第２ｃ層	オリーブ黒色細砂。湧水多い。	～+4.5～+6.1	なし	不明

⑥特記事項

・第１層は、旧島根医科大学敷地造成前の旧水田耕作土であり、人為的に盛土されたものと考えられる。

・第２ａ～ｃ層は、旧水田造成前の時代に神戸川によって運搬された細砂・シルトの堆積層と考えられる。今回の調査区から遺物は認められなかった。

・第２ｂ層からは植物の生痕が認められ、当該期に植物が生える低湿地の環境になったと考えられる。

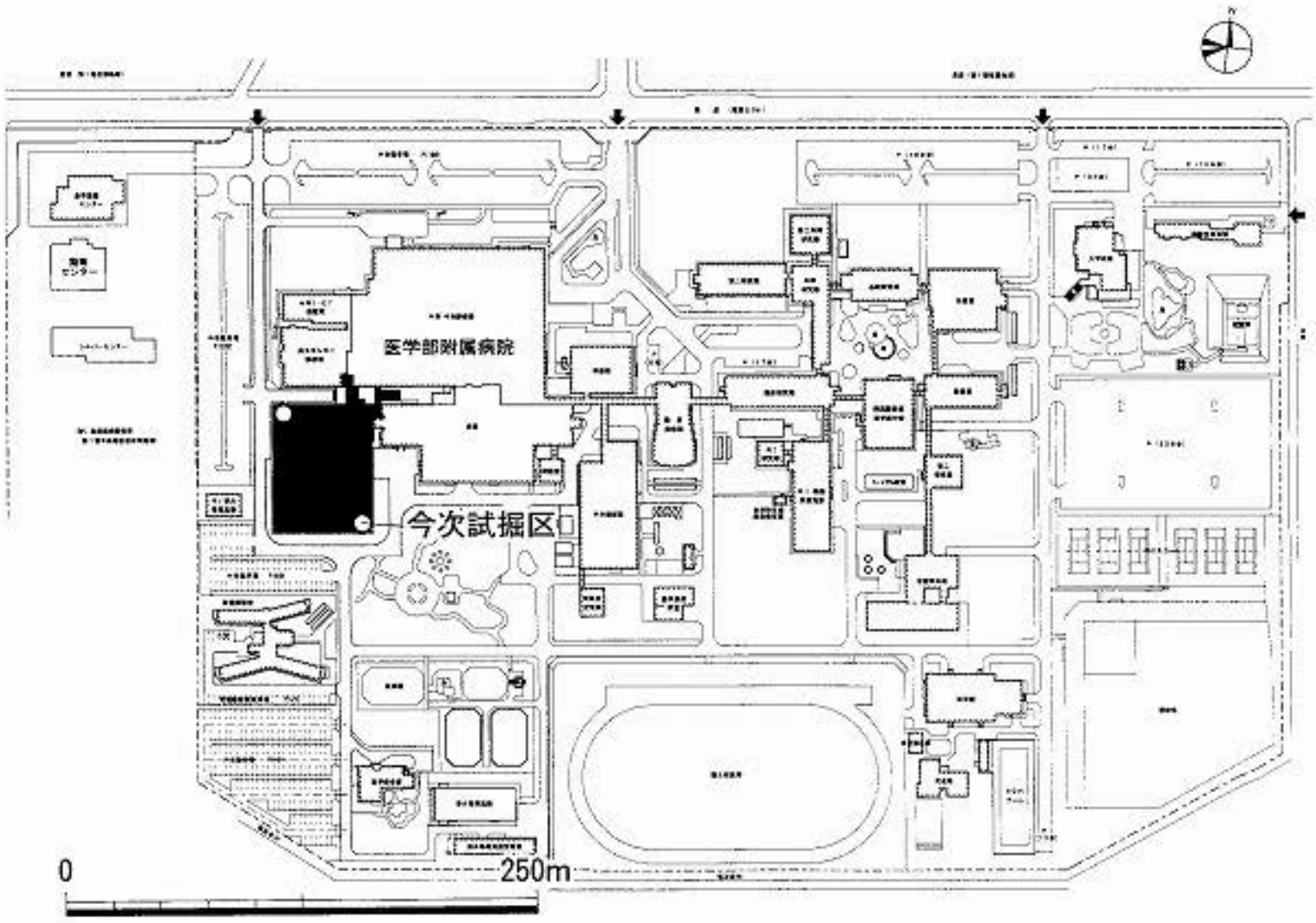


図４　島根大学出雲キャンパス構内遺跡試掘調査位置図（1/5,000）

（3）島根大学構内遺跡第14・15・16次調査、島根大学出雲キャンパス構内遺跡試掘調査の整理・研究

これまでに実施した島根大学構内遺跡第14・15次調査、上記の同遺跡第16次調査等の出土遺物の洗浄・実測・トレース、遺構図面トレースといった室内整理作業を進めた。

7　その他

(1) 島根大学旧奥谷宿舎保存活用検討ワーキンググループの活動

①ワーキンググループの概要

平成18年度、松江市奥谷町に所在する旧制松江高等学校に関係する唯一の建築物「島根大学旧奥谷宿舎（旧制松江高等学校外国人宿舎）」が、歴史的・建築学的価値をもち、地域住民の保存要望もあったことから、修復・活用されていくことになった。これをうけて、宿舎の保存活用策の検討をミュージアムが担当することになり、ミュージアム普及啓発専門委員会の下にワーキンググループが設置された。

ワーキンググループの構成員は、高安克己（館長）、渡邊貞幸（副館長）、会下和宏（ミュージアム専任教員）、竹永三男（法文学部）、小林准士（法文学部）、飯野公央（法文学部）、相良英輔（教育学部）の７名である。平成19年度からは、大久保政博（学術国際部長）、菊池智之（研究協力課長）も加わった。

ワーキンググループでは、建物の歴史的価値、建築学的価値、居住者、周辺地域の歴史的環境等を調査し、地域市民グループや行政等とも連絡調整をはかりつつ、活動してきた。これまでの主な活動は以下の通りである。

②活動抄録

平成18年11月14日　第１回ＷＧ
平成18年12月12日　第２回ＷＧ
平成19年１月12日　「島大ミュージアム学」で若松秀俊教授（東京医科歯科大大学院）が「カルシュ博士と旧制松江高等学校」をテーマに公開授業。
平成19年２月15日　第３回ＷＧ
平成19年２～３月　「奥谷宿舎・居住外国人に関する歴史資料の調査と収集－新聞記事の検索と収集」（竹永）
平成19年３月24日　奥谷宿舎見学会。（参加者約100名）
平成19年５月17日　山陰合同銀行丸会長他が奥谷宿舎を見学。山陰合同銀行本社にて面談（島大：高安・大久保・会下）。
平成19年５月26日　第１回ワークショップ（参加者約40名）
平成19年５月22日　松江市と意見交換（島大：高安・大久保・飯野・会下）於松江市役所
平成19年６月１日　第４回ＷＧ
平成19年７月12日　松浦松江市長他が奥谷宿舎を見学。
平成19年８月３～５日　カルシュ博士長女メヒテルトさん宅（米国テネシー州）での聞き取り調査（高安・相良・若松）
平成19年９月26日　第２回ワークショップ（参加者約140名）
＊上記以外にも個別に打ち合わせなど実施。

③第１回「国登録文化財・島根大学旧奥谷宿舎（旧制松江高校外国人宿舎）の保存活用を考えるワークショップ（参加型学習会）」の内容

趣旨

島根大学では、現在、松江市奥谷町・島根大学旧奥谷宿舎（旧制松江高校外国人宿舎）の保存活用策を検討している。そのためには、まず宿舎の諸情報を地域市民と共有し、建物や周辺地域についての思い出、記憶、活用策などを自由に意見交換する必要があると考え、第１回のワークショップ（参加型学習会）を開催した。

場所　城北公民館（松江市北堀町43）
日時　平成19年５月26日（土）午後１：00～３：00
　　（午前11：00～12：00　宿舎内部の自由見学）

プログラムと内容

・「ワークショップ開催にあたって」高安克己（島根大学学術国際担当副学長・ミュージアム館長）

・**基調講演**「島根大学旧奥谷宿舎（旧制松江高等学校外国人宿舎）の保存と松江のまちづくり（文化財によるまちづくり）」江面嗣人（岡山理科大学教授）

（講演の主な要旨）

・文化財は、本物を保存し、さらに創造的に活用してこそ意味がある。

・日本は、どこに行っても同じで没個性の町が多い。地域市民が主体となって文化財を活かし、個性ある、顔が分かる、松江らしい町づくりが大切。

・地域の文化財に「光」をあて、内外の人々に観ていただき伝えることが本来の「観光」である。

島根大学旧奥谷宿舎

ワークショップの様子

・**調査報告**

・「島根大旧奥谷宿舎（旧制松江高等学校外国人宿舎）の概説」会下和宏（島根大ミュージアム准教授）

本建築は、大正時代に東京・大阪郊外や軽井沢で流行した三角屋根をもつ木造の洋風建築。松江市内でも数少ない希少な木造洋館である。

・「大阪朝日新聞山陰版にみる旧制松江高校」竹永三男（島根大学法文学部教授）

1920～1949年『大阪朝日新聞（山陰版・島根版）』の旧制松江高校～島根大学に関する記事をすべて検索・リスト化し、学校の歴史と地域との関わりを概観。

・**参加者による意見交換**（出していただいたご意見）

（昔の宿舎の様子について）

・南西隅部の浴室は、戦後、昭和30年代半ばに増築。

・屋根は黒瓦、壁の色は、うす青緑だった…。

・戦前は、祝日に日本とドイツ・米国の国旗が揚げられていた。

・玄関向かって右側に大きなイチョウの木があった。

（建物活用策のアイデア）

・「歩いてめぐる城下町観光」の拠点に。

・町並み散歩の拠点として（北堀・石橋・奥谷町界隈は風情のある佇まいを残している…）

・町全体の歴史個性を保存するきっかけにしてほしい。

・レンタサイクルをおく。

・市内の古い建物をめぐる企画など、他の施設との連携をはかってほしい。

・住まいとは、暮らす人との生活と切っても切れないもの。当時の「暮らし」「生活」も含めた（その視点を忘れない）活用の仕方をしてほしい。

・地域の人たちが集えるような場所にしてほしい（サロン的なもの）

・ボランティアガイド（地元の人と島大生が一緒に）をおく。

・ユースホステルのような宿はどうか？

・地元住民・学生・観光客の交流拠点に。

・国際交流・研究の拠点として…各国・民族の写真展示など。在住外国人による母国文化の紹介。

・活用にあたっては、駐車場がほしい。

・大学と市民による共同運営ができないか？
（その他）
・今、まさに市内再開発で松江の個性・歴史性が失われつつある…。
・地域の人々と松江高校外国人宿舎がどのように触れ合っていたか、聞き取り調査をしてほしい。
・内部の改修にあたっては、畳の間を一部屋くらいは残しておくと活用しやすい。
・建物の前を通るたびに、傷みが進行しているようで気になっていた。内部を見学してみて、やはり人が住まないと傷みが進むと思った。今後、改修して生き生きとした建物に生まれ変わってほしい。
・大変有意義な時間だった。以前から気になる建物だったこともあり、これを機会に勉強したい。
・建物の色は、壁のペンキがはげているところをよく観察すると分かるのでは？
・今後、建物の管理をきちんとしてほしい。

■「第２回「国登録文化財・島根大学旧奥谷宿舎（旧制松江高校外国人宿舎）の保存活用を考えるワークショップ（参加型学習会）」の内容

趣旨

島根大学では、現在、松江市奥谷町・島根大学旧奥谷宿舎（旧制松江高校外国人宿舎）の保存修復・活用を検討している。そのためには、地域市民・大学職員らで宿舎の諸情報、記憶、活用策を共有する必要があると考え、ワークショップ（参加型学習会）の開催を企画した。

第２回は、戦前、この建物に長らく住まわれたフリッツ・カルシュ先生の長女メヒテルトさん（米国在住）への聞き取り調査成果を中心に報告した。

場所　島根大学（松江キャンパス）教養講義室棟１号館302号室

日時　平成19年９月26日（水）　午後１：00～４：00

プログラムと内容

・「第２回ワークショップ開催にあたって」高安克己（島根大学副学長・ミュージアム館長）

・基調講演

「メヒテルトさんの語る外国人宿舎と松江の日々」若松秀俊（東京医科歯科大学大学院教授）

（講演の主な要旨）

・カルシュ博士の松江での日々、松江高校生徒との関わり、長女メヒテルトさんのこと、若松先生とフリーデルンさんとの偶然の出会いなどについてスライドをまじえて分かりやすく解説。

・調査報告

・「メヒテルトさんのインタビュービデオ上映」解説・高安克己

８月に米国テネシー州在住のメヒテルトさん宅でインタビューしたビデオを上映。日本語が堪能で、当時の松江での懐かしい思い出を語っていただいた。

・「カルシュ博士のころの外国人宿舎」相良英輔（島根大学教育学部教授）

メヒテルトさんへの聞き取り調査でわかった奥谷宿舎の戦前の状況（壁・屋根の色、部屋の状況など）について、パワーポイントで分かりやすく解説。

・参加者による意見交換（出していただいたご意見）

・カルシュ博士と小泉八雲との関係についてもう少し詳しく教えてほしい。
・奥谷宿舎の急勾配の屋根に葺かれていたのは、出雲瓦か？スレートか？…古い戦前の写真では詳細な形状がわかりづらい。

（2）第10回大学博物館等協議会（第２回博物科学会）への参加

大学博物館等協議会は、会員相互で緊密に連絡・協力をとりあって、大学等における学術標本の収集・保存・活用の向上を図り、教育・研究の進展に寄与することを目的としたものである。平成19年度は、６月７～８日、九州大学にて開催された。会場では、島根大学ミュージアムを紹介するポスターを掲示し、ＰＲした。

8　ミュージアム教員の活動記録

(1) 会下和宏　EGE Kazuhiro　准教授

論文ほか

・会下和宏「弥生時代の鉄剣・鉄刀について」『日本考古学』第23号　2007.5

・会下和宏「鉄器副葬からみた弥生墳墓」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター　2007.10

研究発表等

・会下和宏「島根県遺跡データベースとリポジトリ」『シンポジウム：遺跡資料リポジトリを考える』国立大学図書館協会中国四国地区協会　2007.11.21（於・岡山大学附属図書館）

・会下和宏「島根大学松江キャンパス周辺の歴史・文化資源について」『山陰地方における歴史・文化資源の発掘と活用に関する研究プロジェクト・第6回研究例会』山陰地方における歴史・文化資源の発掘と活用に関する研究プロジェクト　2007.12.5（於・島根大学）

社会的活動

・報告「島根大旧奥谷宿舎（旧制松江高等学校外国人宿舎）の概説」第1回国登録文化財・島根大学旧奥谷宿舎（旧制松江高校外国人宿舎）の保存活用を考えるワークショップ（参加型学習会）　2007.5.26（於・島根県松江市城北公民館）

・講演「弥生時代の鉄製武器について」田和山やよい塾　2007.7.14（於・島根県松江市田和山遺跡公園）

・講演「前漢・皇帝陵から見た東アジア」田和山やよい塾　2007.8.25（於・島根県松江市田和山遺跡公園）

担当授業

次の授業を担当した。

・「博物館資料論」「博物館情報論」「博物館経営論」（島根大学法文学部）

・「考古学実習Ⅲ」（島根大学法文学部）

・「日本の自然Ａ」（島根大学、外国人留学生向け講義）（分担）

・「島大ミュージアム学」（島根大学、特別講義、公開授業）（分担）

Ⅲ　島根県島根大学構内遺跡（10次）出土試料の炭素14年代測定

遠部慎・宮田佳樹（国立歴史民俗博物館）

概要

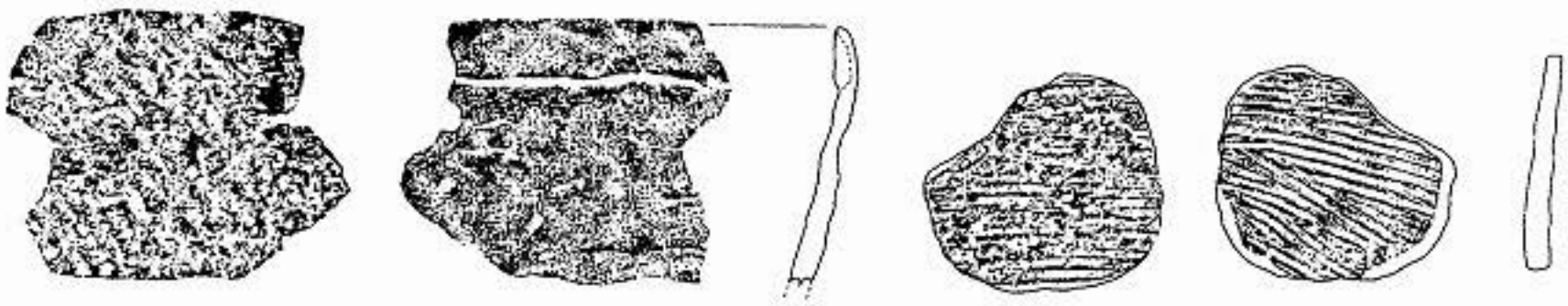
島根県松江市島根大学構内遺跡（10次）から出土した炭化物の炭素14年代測定を行ったので、その結果を報告する。試料は遠部慎が採取した。試料の前処理は年代測定グループ、（株）パレオ・ラボが行い、測定は東京大学（MALT）によるものである。測定結果は計測値（補正）とともに、実年代の確率を示す較正年代値を示した。また、その根拠となった較正曲線を示した。これまで、山陰地方で測定例の少ない土器付着物の縄文時代前期から中期の年代測定例である。

1　測定資料

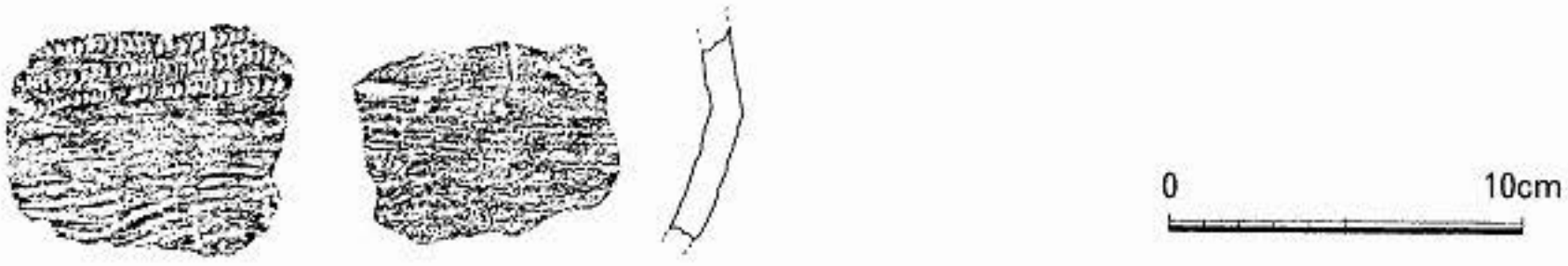
測定対象とした資料は、遠部が島根大学構内遺跡（10次）から採取した土器付着物３点（３個体）である。試料番号はSMDG-15・16・17とした（図５）。

10次調査は1999年に実施され、７枚の層序が確認された。そのうち、４層は海成ないしは水成のシルト層である。測定対象とした遺物が出土した4a層は潮間帯の水成堆積物である。

SMDG-15は外面に無節Rの縄文を施す。内面に肥厚帯をもつ。波子式に該当する。SMDG-16は内外面とも条痕調整を施す。SMDG-17は、屈曲部を有し、内外面とも条痕調整を施し、外面横位にD字の連続刺突文を施す。羽島下層Ⅱ式に該当する。



SMDG-15　　SMDG-16



SMDG-17

図５　年代測定を実施した土器（Ｓ＝1/3）

表１　年代測定対象とした試料

試料記号	トレンチ・層位	測定対象	時期	土器型式	付着状況
SMDG-15	99S-10第4a層	土器付着炭化物	縄文中期	波子式	口縁部外面
SMDG-16	99S-10第4a層	土器付着炭化物	縄文前期	条痕文（土製円盤）	胴部外面煤
SMDG-17	99S-10第4a層	土器付着炭化物	縄文前期	羽島下層Ⅱ式	胴部内面焦

2　炭化物の処理

付着炭化物試料については、注１に記した手順で試料処理を行った。(1) の作業は、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において新免歳靖が行い、(2)(3)の作業をパレオ・ラボ社に委託し、測定は東京大学工学部（MALT）で行った。回収/処理量は10%以下であるが、G化の収率は40-60%である（表２）。

表２　試料の重量

試料番号	採取量(mg)	採取量(mg)	残量(mg)	回収量(mg)	回収/処理	前処理後	燃焼量(mg)	CO2(mg換算)	収率
SMDG-15	38.57	38.57	0	3.47	9.0%	良	3.17	1.69	53.4%
SMDG-16	33.04	33.04	0	1.62	4.9%	良	3.24	2.14	66.0%
SMDG-17	25.16	25.16	0	2.50	9.9%	良	1.45	0.56	38.5%

採取量・処理量・回収量・燃焼量は、炭化物の重量(mg)、ガスは二酸化炭素の炭素相当量(mg)、率は%、採取量及び残量のαは未計量
回収量/処理量(%)、収率は燃焼量/CO2(%)

3　測定結果と暦年較正

測定結果は、注２に示す方法で、同位体効果を補正し^{14}C年代、較正年代を算出した。年代測定結果を表３に示す。

表３　測定した試料の炭素14年代（BP）と暦年較正年代（Cal BC）

試料番号	測定機関番号	δ^{13}C(‰)	^{14}C炭素年代 (BP)			(Cal BC)	暦年較正年代 確率分布（%）
SMDG-15	MTC-	(-24.95±0.16)	4525	±	35	3360-3260 3245-3100	33.9% 61.6%
SMDG-16	MTC-	(-26.05±0.22)	5830	±	70	4845-4515 4510-4500	95.0% 0.5%
SMDG-17	MTC-	(-24.58±0.25)	5720	±	100	4780-4360	95.4%

（測定機関番号は取得中である。）

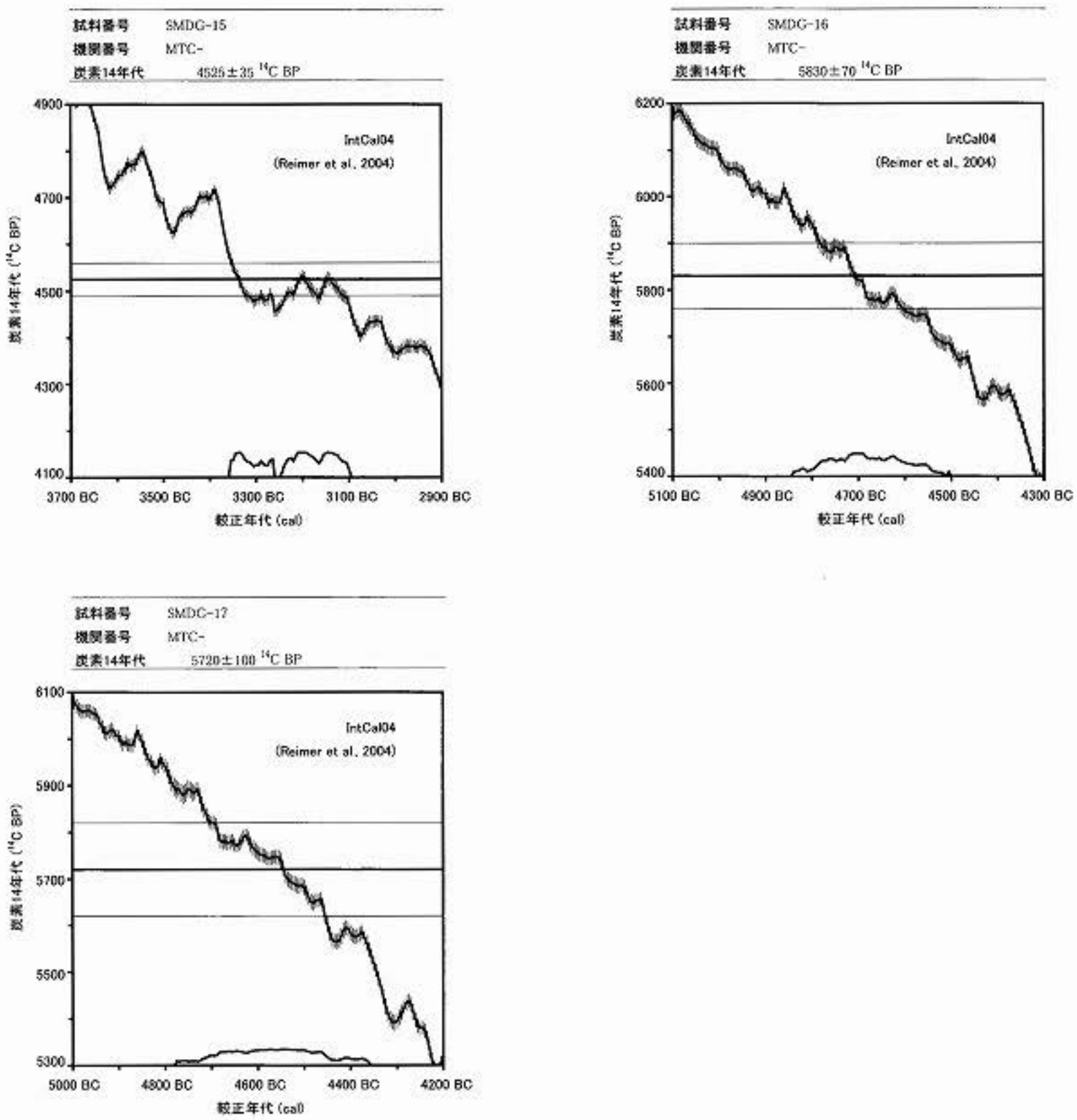


図６　測定試料の較正年代

４　測定結果について

これまで、山陰地方での縄文時代の年代測定例としては、アカホヤや三瓶火山灰（ハイカ）などについての測定は多いものの、土器付着炭化物の測定は少ない。管見では、松江市西川津遺跡（小林編2007）、出雲市夫手遺跡（今村ほか2000）、築山遺跡（炭素14年代測定グループ2005）などの測定例がある（遠部・宮田2008未刊）。

そこでは、夫手遺跡と西川津遺跡の西川津式の土器付着物は6200-5900BPにまとまる。さらに、矢野健一氏（矢野2002）のいう１式は6240±25BP、２式は測定していないが、３式は5975±25BP、４式は5910±30BPと極めて、土器型式と整合的な年代的推移を示す。また、縄文後期の中津式包含層から出土した粗製深鉢は3905±45BPである。

今回、島根大学構内遺跡（10次）で炭素14年代測定できた土器付着物は、その特徴から前期前半、および中期前半と考えられ、土器編年のうえでは、これまでに測定を行っている西川津式と中津式の間に位置づけられる。得られた年代測定値は、羽島下層Ⅱ式が5720±100BP、波子式が4525±35BPであり、これまでの測定例や周辺地域の測定とも矛盾しない。

また、本データは山陰地方における縄文時代前期前半（羽島下層Ⅱ式）、中期前半の土器付着物としては、初めてのAMS年代測定データとなる。西日本の前期後半の測定例は少なく、今後データの蓄積が必要であろう。

本稿の測定成果は、平成16-20年度科学研究費補助金学術創成研究（課題番号16GS0118）、平成19-20年度科学研究費補助金若手研究(スタートアップ)（課題番号19800058）、平成18-19年度科学研究費補助金若手研究（B）（課題番号18700679）の成果の一部を用いている。

暦年較正については今村峯雄、坂本稔の方法に従う。本稿は遠部慎・宮田佳樹（以上、国立歴史民俗博物館）が協議し、執筆した。

本稿作成にあたり、会下和宏（島根大学ミュージアム）には、資料調査の機会を与えていただいた。渡辺正巳（(株）文化財調査コンサルタント)、国立歴史民俗博物館・学術創成研究グループには資料調査や位置づけについて、ご教示、ご協力をいただいた。記して感謝申し上げたい。

注1　土器付着物については下記の方法で処理した。

(1) 前処理：酸・アルカリ・酸による化学洗浄

AAA処理に先立ち、土器付着物については、アセトンに浸け振とうし、油分など汚染の可能性のある不純物を溶解させ除去した（2回)。AAA処理として、80℃、各1時間で、希塩酸溶液（1N　HCl）で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去（2回）し、さらにアルカリ溶液（NaOH、1回目0.1N、2回目以降1N）でフミン酸等を除去した。アルカリ溶液による処理は、5回以上行い、ほとんど着色がなくなったことを確認した。さらに酸処理2回（1N　HCl　1時間）を行いアルカリ分を除いた後、純水により洗浄した（4回)。

(2) 二酸化炭素化と精製：酸化銅により試料を燃焼（二酸化炭素化)、真空ラインを用いて不純物を除去。

AAA処理の済んだ乾燥試料を、500mgの酸化銅とともに石英ガラス管に投じ、真空に引いてガスバーナーで封じ切った。このガラス管を電気炉で、850℃で3時間加熱して試料を完全に燃焼させた。得られた二酸化炭素には水などの不純物が混在しているので、ガラス製真空ラインを用いてこれを分離・精製した。

(3) グラファイト化：鉄触媒のもとで水素還元し、二酸化炭素をグラファイト炭素に転換。アルミ製カソードに充填。

1.5mgの炭素量を目標に二酸化炭素を分取し、水素ガスとともに石英ガラス管に封じた。これを電気炉で、およそ600℃で12時間加熱してグラファイトを得た。ガラス管にはあらかじめ触媒となる鉄粉が投じてあり、グラファイトはこの鉄粉の周囲に析出する。グラファイトは鉄粉とよく混合させた後、穴径1mmのアルミニウム製カソードに600Nの圧力で充填した。

注2　測定値について、以下の方法で較正年代を算出した。

年代データの^{14}C BPという表示は、西暦1950年を基点にして計算した14C年代（モデル年代）であることを示す。^{14}C年代を算出する際の半減期は、5、568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差（1標準偏差、68%信頼限界）である。

AMSでは、グラファイト炭素試料の^{14}C/^{12}C比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した^{13}C/^{12}C比により、^{14}C/^{12}C比に対する同位体効果を調べ補正する。^{13}C/^{12}C比は、標準体（古生物belemnite化石の炭酸カルシウムの^{13}C/^{12}C比）に対する千分率偏差δ^{13}C（パーミル、‰）で示され、この値を-25‰に規格化して得られる^{14}C/^{12}C比によって補正する。補正した^{14}C/^{12}C比から、^{14}C年代値（モデル年代）が得られる。加速器による測定は同位体補正効果のためであり、必ずしも^{14}C/^{13}C/^{12}C比を正確に反映しないこともあるため、東京大学工学部（MALT）測定分については、加速器による測定を参考として付す。

測定値を較正曲線IntCal04（^{14}C年代を暦年代に修正するためのデータベース、2004年版）（Reimer et al 2004）と比較することによって暦年代（実年代）を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、暦年代の推定値確率分布として表す。暦年較正プログラムは、国立歴史民俗博物館で作成したプログラムRHCal（OxCal Programに準じた方法）を用いている。統計誤差は2標準偏差に相当する、95%信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦　cal BCで示す。( ) 内は推定確率である。

参考文献

今村峯雄・坂本稔・永嶋正春　2000「松江市・夫手遺跡出土縄文時代前期土器（漆液容器）の実年代」『手角地区ふるさと農道整備事業にともなう夫手遺跡発掘調査報告書』、PP.104-106、松江市教育委員会

会下和宏編　1999『島根大学埋蔵文化財調査研究報告第６冊　島根大学構内遺跡第10次調査（橋本地区３）』島根大学埋蔵文化財調査研究センター

遠部慎・宮田佳樹　2008未刊「島根県島根大学構内遺跡（14次）出土試料の炭素14年代測定」

小林謙一編　2007『AMS炭素14年代測定を利用した東日本縄紋時代前半期の実年代の研究　（課題番号：17520529）平成17～18年度科学研究費補助金基盤研究（C）（１）研究成果報告書』国立歴史民俗博物館

炭素14年代測定グループ　2005「第５章　理化学分析結果　出雲市築山遺跡出土試料の14C年代測定」『県道出雲三刀屋線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　築山遺跡Ⅰ』出雲市教育委員会、pp.112-116

矢野健一　2002「中四国地方における縄文時代早期末前期初頭の土器編年」『環瀬戸内海の考古学』上巻、古代吉備研究会、pp.91-110

Reimer、Paula J.et al.　2004 IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration、 0-26 Cal Kyr BP *Radiocarbon* 46(3)、1029-1058(30).

Stuiver、M.、Reimer、P.J.、Bard、E.、Beck、J.W.、Burr、G.S.、Hughen、K.A.、Kromer、B.、McCormac、F.G.、 v.d.Plicht、J.、 and Spurk、M. (1998): INTCAL98 radiocarbon age calibration、 24、000-0 cal BP. Radiocarbon、40(1)、 1041-1083.

SMDG-15 採取試料

SMDG-15 採取部位

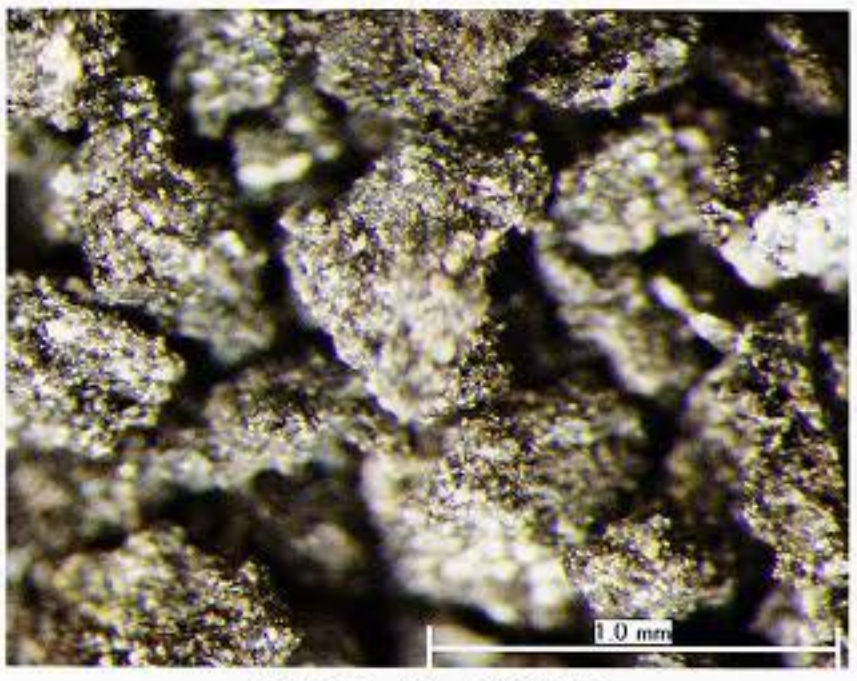
SMDG-16 採取試料

SMDG-16 採取部位

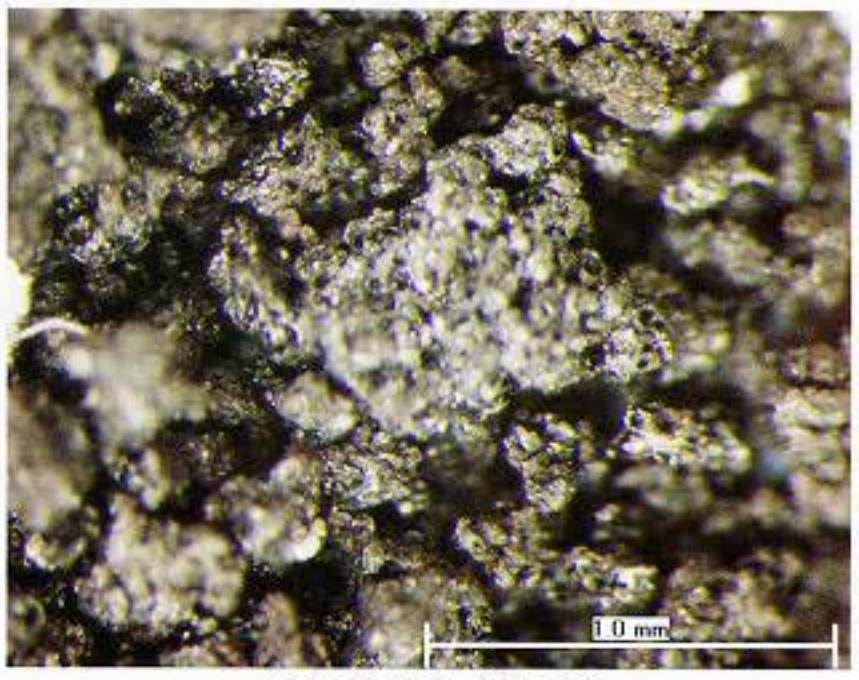
SMDG-17 採取試料

SMDG-17 採取部位

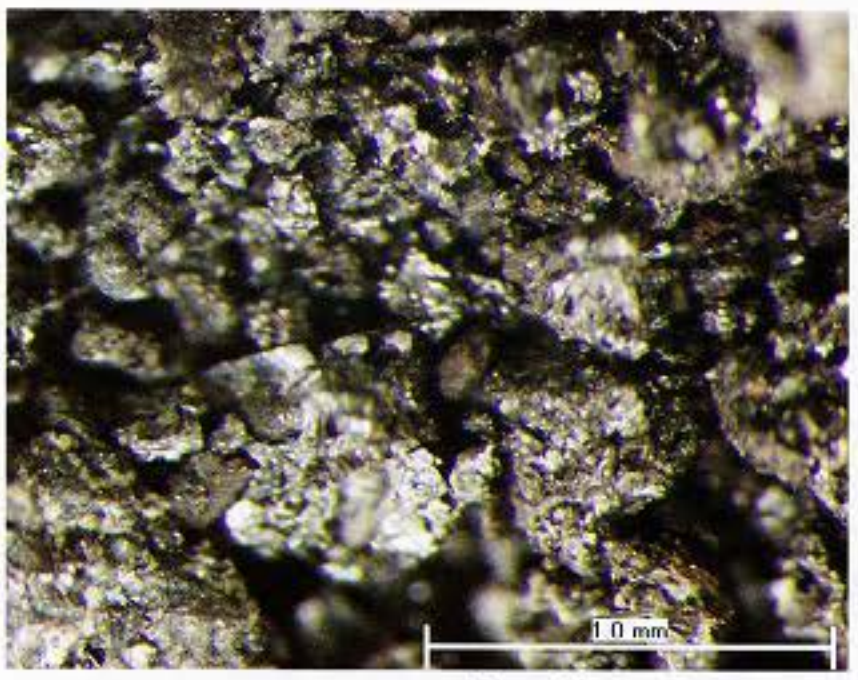
写真１　採取試料



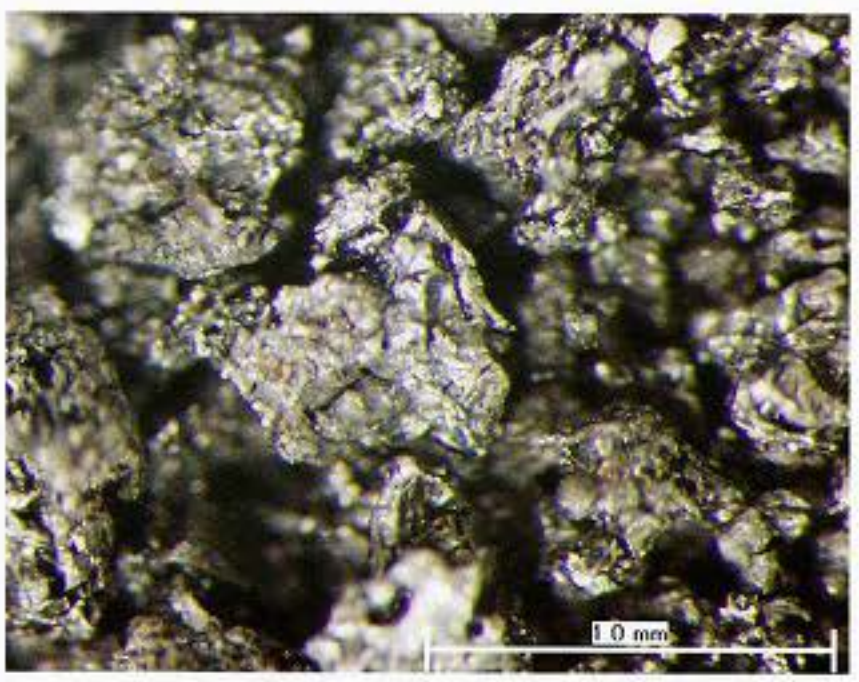
SMDG-15　処理前



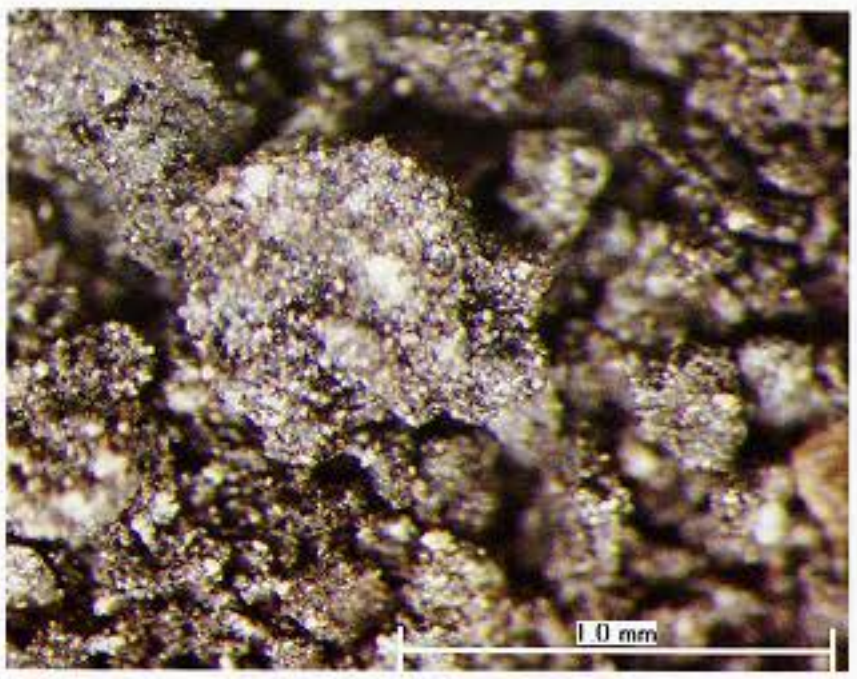
SMDG-15　処理後



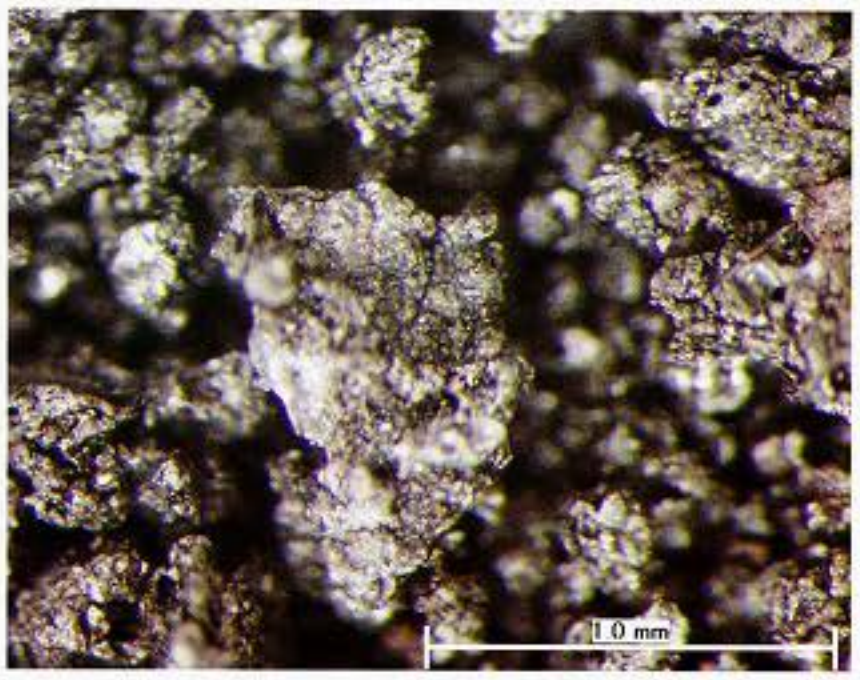
SMDG-16　処理前



SMDG-16　処理後



SMDG-17　処理前



SMDG-17　処理後

写真 2　前処理の状況

Ⅳ　島根大学（松江キャンパス）周辺の歴史・文化資源について

会下　和宏

1　はじめに

島根大学では、平成18年度からキャンパス全体を「まるごとミュージアム」として位置付け、ミュージアム本館を核に分散する展示施設、校舎、構内の遺跡などをネットワーク化して、キャンパスツアーや授業など、様々に活用をはかってきた。

こうした手法は、北欧やフランスなどで発達してきた「オープンエア・ミュージアム」・「エコ・ミュージアム」を大学キャンパスに応用したものであり、既に岩手大学などでも試みられてきた。「オープンエア・ミュージアム」は、地域全体をミュージアムとしてとらえ、コア施設を中心に既存の資源・施設を有効活用していくという、新しいミュージアム運営の概念である。

島根大学ミュージアムでは、こうした取組みをキャンパス内だけに留まるものとせず、キャンパス周辺まで広げ、「地域まるごとミュージアム」として様々な地域資源を再発掘・活用し、地域に溶け込んだ大学の創造、地域に根ざした教育研究の振興、地域活性化を図っていきたいと考えている。こうした構想は、従来の大学に対してイメージされる「象牙の塔」から脱却し、「人とともに・地域とともに」という島根大学が目指す理念にも沿うものであると考える。

今回は、こうした構想のもとに、手始めに島根大学・松江キャンパス周辺（松江市橋北地区）の歴史・文化資源を掲載した携帯用散策マップ『松江温故知新・いにしえのまちめぐり（橋北版）』を制作した[1]。小稿は、その記録と今後の課題について認識しておくものである。

2　ミュージアムの「創造都市効果」

さて、上山信一・稲葉郁子（2003）によれば、これまで、わが国では「文化」「ミュージアム」＝「儲からない」「おまけ、つけ足し的存在」と捉えられていたが、今後は以下のような関係をもつという。

・これまでは経済が文化を支えてきたが、これからは逆もあり得る。

・これまでは都市の繁栄、威信の象徴としてミュージアムがつくられたが、これからは逆に、ミュージアムが都市を支える装置のひとつとなる。

すなわち、経済と文化は対立するものではなく、相互依存関係にあり、ニューヨーク、パリなどの大都市をはじめ、欧州の地方都市でもミュージアムが経済効果をもたらし、都市再生に資するものとなっているという。ミュージアムがもたらす地元経済への貢献は、単に集客による消費需要効果にとどまらず、才能を持った人材を必要とする「創造性」を活かした産業群の育成や誘致に大きな役割を果たすことにあると考えられている。近年の都市経営論においては、これをミュージアムの「創造都市効果」という。

すなわち、これからの都市の繁栄を支えるのは、ハイテク系の人材（エンジニア、医師、プログラマーなど）あるいはハイタッチ系の人材（セラピスト、アーティスト、デザイナー、シェフなど）によるサービス産業とされる。彼らはハイセンスな消費を通じて感性を磨き、才能の枯渇を防ごうとするので、こうした才能ある人材を集め、彼らに創造性を発揮させるためには、ミュージアム、コンサートホール、大学、図書館などの文化施設が充実した文化的刺激に満ちた街、すなわち「創造都市」をつくる必要がある。

おりしも、松江市や島根県では、地域発の世界的なプログラミング言語「Ruby」を軸にしたソフト系ＩＴ産業の振興が地域産業活性化政策のなかに組み込まれているところである（野田2007など）。前記のような「創造都市」を目指していくうえで、歴史・文化資源の再発掘と情報発信・普及啓発による文化的環境の整備は、単に観光振興に留まらず、広い意味での経済振興にとっても無意味ではあるまい。

3　島根大学（松江キャンパス）周辺の歴史・文化資源マップ

図７は、前章までで述べたような遠大な長期目的・目標を見据えつつ、島根大学・松江キャンパス周辺（松江市橋北地区）の歴史・文化資源を網羅的にリストアップし、地図化したものである。なお、ここでは掲載していないが、制作した携帯用散策マップでは、江戸時代初期（島根大学附属図書館所蔵「松江城下町絵図＜堀尾期＞」）、江戸時代後期（松江市所蔵「天保年間松江城下町絵図」）、昭和初期の地図（陸地測量部昭和11年発行地図）にも、当時存在していたものをマッピングしている。

以下にリスト化した地域資源は、社寺・日本建築、近代洋風建築、その他（埋蔵文化財・ミュージアム・歴史公園・観光文化施設など）で、マップ裏面にはテーマごとに歩いてめぐる幾つかのモデルコース（洋館をめぐる、遺跡を歩く、城下町を探る、偉人を想う）も提案している。

幸い、島根大学・松江キャンパスから松江城やその周辺にかけては、江戸・明治時代以来の伝統的景観がよく残されており、歴史・文化資源に関しては枚挙にいとまがない。とりわけ松江市石橋町・奥谷町エリアは、従来の観光ルートからややはずれた場所にありながら、白壁の造り酒屋、醤油屋、連子窓の町屋、社寺、洋館など、伝統的・歴史的建造物が集積したエリアであり、資源のリスト化は容易だった。

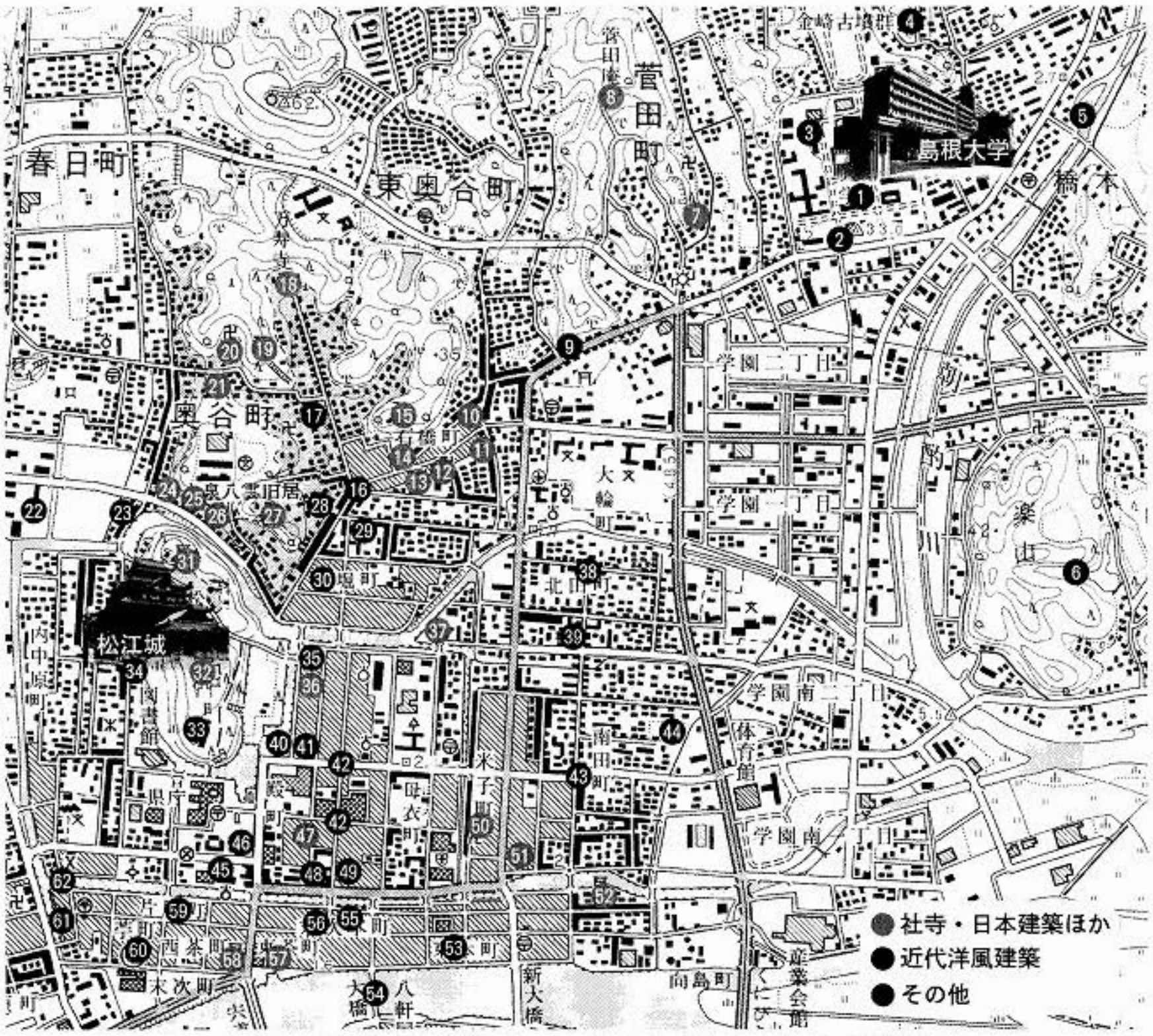


図７　島根大学（松江キャンパス）周辺の歴史・文化資源
国土地理院平成15年発行地図をもとに作成

1　**島根大学ミュージアム本館**　島根大学が所蔵する標本類を展示。月～金曜日・9：00～17：00開館（祝休日・年末年始閉館）。

2　**島根大学正門**　島根大学の前身校のひとつ旧制松江高校から受け継がれた門柱。ひとつの白御影石で造られ、大正時代に流行したセセッション様式の彫刻が施される。大正13年造。国登録文化財。

3　**菅田ヶ丘古墳移築展示**　島根大学松江キャンパス内にあった5世紀頃の古墳。水晶製の玉類などが出土した。学生食堂前に移築展示されている。

4　**金崎古墳群**　11基以上からなる5世紀頃の古墳群。1号墳は「前方後方墳」。鉄剣・鏡・玉類などが出土した。国指定文化財。

5　**西川津遺跡**　朝酌川沿いにあった遺跡。弥生時代の銅鐸や大量の土器・石器が出土したことで有名。

6　**楽山公園**　松江藩主の別荘地。夏、公園内の弁天池一面にスイレンの花が咲くほか、桜、ツツジ、紅葉など四季を通して楽しめる。小泉八雲の随筆にでてくる推恵（すいけい）神社がある。

7　**貴船神社**　見事な牡丹の彫物をもつ来待石（きまちいし）の石灯篭がある。

8　**菅田庵（かんでんあん）**　寛政2（1790）年、松平治郷（不昧公）が松江藩家老・有沢家の山荘に建てさせた茶室。国指定文化財。

9　**赤崎観音付近の切通し**　城下町北東入口の警備の拠点。

10　**李白酒造**　若槻礼次郎ゆかりの銘酒「李白」蔵元。明治15年創業。

11　**児守稲荷神社（こもりいなりじんじゃ）**　小泉八雲がしばしば訪れた神社。子どもの守り神とされている。

12　**順光寺・光徳寺**　順光寺は松江藩家老神谷家の菩提寺。光徳寺には、明治維新期に松江藩の危機を救った玄丹お加代の墓、 昭和初期に永井瓢斎が建てたお加代地蔵がある。

13　**原田本店**　明治元年創業。銘酒「都乃花」蔵元。

14　**蔵元カネモリ醤油**　明治8年創業。吉野杉で作られた仕込み桶は80もあり、創業時から絶やされることがない。千手院に向かう路地に並ぶ赤壁の蔵群は壮観。

15　**千手院（せんじゅいん）**　「出雲国十三仏霊場」のうちの6番目。しだれ桜は樹齢200年以上。市指定文化財。高台にあり景色が良い。

16　**石橋**　江戸時代、奥谷川にかかる石橋があった。商工業で栄えた石橋町の名前の由来となった。

17　**島根大学旧奥谷宿舎**　戦前は、旧制松江高校外国人宿舎。大正13年築の木造2階建て洋館。もとは瓦葺き。2階外壁はモルタル投げつけ塗り。著作権の父・ブラーゲ博士、永井隆らを育てた哲学者・カルシュ博士らが暮らした。国登録文化財。

18　**萬寿寺（まんじゅじ）**　臨済宗。芥川龍之介も訪れた。月2回、座禅会開催。

19　**田原神社随神門（たわらじんじゃずいしんもん）**　彫刻家・小林如泥（こばやしじょてい、1753～1813）作の見事な彫物がある。入母屋造。市指定文化財。境内には多くのこま犬、獅子、シカの石像などがある。高台にあり景色が良い。

20　**桐岳寺（とうかくじ）**　曹洞宗。佐陀川を開削した清原太兵衛（1711～1787）の墓、「史記」の研究で有名な漢学者・滝川亀太郎（1865～1946）の墓、五百羅漢がある。

21　**真光寺**　浄土真宗。昭和初期の洋画家・松本竣介（1912～1948）の墓がある。

22　**堀川遊覧船乗り場・松江堀川地ビール館**　堀川遊覧船は、江戸時代からある堀川を小船に乗ってめぐることができる。松江堀川地ビール館には、地ビールレストランがあるほか、松江のおみやげがたくさん並ぶ。

23　**松江北堀美術館**　19世紀末に花開いたフランスの工人、エミール・ガレ（1846～1904）の陶器を収蔵する世界有数の美術館。

24　**小泉八雲旧居**　明治24年、ラフカディオ・ハーンが約半年間暮らした。享保年間（1716～36）頃の建築とみられる。国指定文化財。

25　**塩見縄手旧武家屋敷遺構**　長屋門・坂塀が市指定文化財。昭和54年、第23代田部長衛門が田

部美術館として開館。

26 **武家屋敷（中老塩見氏屋敷）**　江戸時代初期から松江藩の六百石程度の中級藩士が暮らした。「史記」の研究で有名な漢学者・滝川亀太郎（1865～1946）はここで育ったといわれる。市指定文化財。

27 **明々庵**　安永８(1779) 年ごろ、松平治郷（不昧公）が松江藩家老・有沢家本邸内に建てさせた茶室。不昧公150年忌の昭和41年、現在地に移築。県指定文化財。

28 **大本島根本苑（おおもとしまねほんえん）**　昭和10年第２次大本事件の舞台。

29 **城北公民館（じょうほくこうんみんかん）**　松江藩中老・小田切備中や松江藩御典医・北尾徳庵の屋敷跡。小田切備中は、第６代藩主松平宗衍（むねのぶ）を助けて藩財政の建て直しに努力した。北尾徳庵は、松江藩主の健康管理を担当した西洋医学にも通じた医者。

30 **初代松江市長・福岡世徳（ふくおかつきのり）の屋敷跡**　福岡世徳（1848～1927）は、鉄道を松江まで開通させるなど、松江の発展につくした。

31 **城山稲荷神社**　小泉八雲も好んだ二千体のキツネがある神社。

32 **松江城**　全国に12箇所しかない現存する天守閣のひとつ。慶長16（1611）年、堀尾吉晴によって築城。黒と白のコントラストが美しい。別名「千鳥城」。国指定文化財。

33 **興雲閣（こううんかく）**　明治36年、工芸品陳列所として建てられたコロニアル様式の木造２階建て洋館。入母屋造り、桟瓦葺き。車寄せや基礎に大根島産「島石」が多く用いられる。もともとは、明治天皇の山陰巡幸にあたって計画された建物だったが、日露戦争のあおりで中止された。明治40年には、皇太子殿下（のちの大正天皇）が山陰行啓の御旅館として使用された。昭和48年、松江郷土館として開館。県指定文化財。

34 **亀田橋**　このあたりに志賀直哉・芥川龍之介らが暮らした。志賀直哉は、大正３年の夏に滞在した様子を「濠端の住まい」に書いた。芥川龍之介は、大正４年８月に滞在した様子を「松江印象記」に書いた。

35 **松江市歴史資料館**　江戸時代、広大な家老屋敷があった。堀尾期（1600～33年）には堀尾采女（うねめ、4000石）、京極期（1634～37年）には佐々木九郎兵衛（10000石）、松平期（1638～1868年）には乙部家（4250石）などが配置されていた。 発掘調査によって建物跡・石囲遺構などが発見され、たくさんの肥前陶磁器（唐津焼・伊万里焼）、土師器、木製品などが出土している。資料館は、平成22年度オープン予定。

36 **松江藩家老朝日家長屋**　唯一現存する松江藩家老屋敷の長屋。朝日家は、松平直政に召し抱えられ、のち代々家老となった家。市指定文化財。

37 **観月庵（かんげつあん）**　普門院のなかにある。松平治郷（不昧公）・小泉八雲ゆかりの茶室。市指定文化財。

38 **江戸初期からある北田町のカギ型路**　島根大学所蔵「松江城下町絵図（堀尾期）」（1620～1633製作）にもみえるカギ型状の交差点。

39 **北田町集会所・愛隣館（あいりんかん）**　昭和６年築の木造洋館。もとは瓦葺きだが、現在はスレート。明治29年、福田平治が開き、明治37年、当地に移ってきた松江育児院の一部。

40 **堀川遊覧船乗り場**　堀川遊覧船は、江戸時代からある堀川を小船に乗ってめぐることができる。

41 **島根県物産観光館**　島根県のおみやげがたくさん並ぶ。

42 **江戸初期からある殿町のカギ型路**　島根大学所蔵「松江城下町絵図（堀尾期）」（1620～1633製作）にもみえるカギ型状の交差点。

43 **江戸初期からある南田町のカギ型路**　島根大学所蔵「松江城下町絵図（堀尾期）」（1620～1633製作）にもみえるカギ型状の交差点。

44 **舟つきの松**　松平治郷（不昧公）の妻・青彡楽院（せいらくいん）が仙台・伊達家から嫁入りした時に持参し植えた松。この松を目印に舟を着けた。別名傘松とも呼ばれる。市指定文化財。

45 **島根県尋常中学校跡地**　現在は島根県警本部庁舎。明治11年に造られ、小泉八雲が明治23年９月から教鞭をとった学校があった。「ヘルン校舎」として親しまれていたが、昭和51年６

月、解体されてしまった。

46 **竹島資料室**　旧島根県立博物館。竹島に関する資料が展示されている。建物は、菊竹清訓建築設計事務所設計。1959年築。

47 **蓬莱荘（ほうらいそう）**　昭和元年築の数奇屋料亭建築。現在はレストラン・喫茶店などが営業。

48 **カラコロ工房**　旧日銀松江支店２代目の建物。昭和13年築の鉄筋コンクリート造、地下１階・地上３階建てギリシャ風近代銀行建築。長野宇平治設計。清水組施工。

49 **山陰合同銀行北支店**　旧八束銀行本店。大正15年築の鉄筋コンクリート造、銀行建築。設計・施工鴻池組。

50 **自性院（じしょういん）**　「出雲国十三仏霊場」のうちの７番目。薬師如来像を安置。

51 **米田酒造**　明治29年創業。昭和30年、松江藩「木実方（ロウソク製造）」の作業蔵を買いうけ移築。木造・土蔵造。昭和30年ごろに造られたイギリス積みのレンガ造煙突が美しい。

52 **舩玉稲荷神社（ふなだまいなりじんじゃ）**　海上安全・船の守護神として信仰された。一帯は、江戸時代、船屋・船奉行所など水上交通に関わる施設が並んでいた。付近には、松江藩の名力士・雷電為右衛門（らいでんためえもん）の屋敷があった。

53 **旧トラヤ紳士服店**　昭和７年頃築。木造の洋風建築。外壁には、当時流行のスクラッチタイルを使用。来待石のレリーフが面白い。

54 **松江大橋**　現在のものは、17代目で昭和12年完成。橋脚・橋台は洋式、橋体は純日本式で、高欄・擬宝珠は彫刻家・内藤伸のデザイン。全長134m。

55 **カラコロ広場・堀川遊覧船乗り場**　カラコロ広場は、京橋川沿いのレトロ調広場で、まわりに京店商店街がある。堀川遊覧船は、江戸時代からある堀川を小船に乗ってめぐることができる。

56 **かげやま呉服店**　旧第三国立銀行。明治35年築。木造、分厚い土蔵造り。窓の扉が重厚で銀行らしさがある。

57 **国暉酒造（こっきしゅぞう）**　現在の店舗は、文化５（1808）年の大火の際に再建されたもの。明治７年、岩橋清次郎が酒造業を創業。

58 **須衛都久神社（すえつぐじんじゃ）**　「出雲国風土記」の島根郡須衛都久社に比定される。もとは亀田山にあったが、堀尾吉晴の松江城築城に先立って移転された。その後も、数回の移転を経て、延宝２（1674）年の大洪水後に今の場所に移された。江戸時代は権現社といわれた。

59 **旧三原歯科医院**　大正15年築の洋館。

60 **田野家住宅**　旧田野医院。明治４年築の擬洋風建築。壁厚約40㎝の土蔵造り。アーチ型の窓が特徴。もとは、明治６年、壺内同春が開業した苧町病院とみられる。苧町小学校として利用されたのち、明治19年、田野俊貞が安仁堂医院として開業、医学生の育成もした。永井隆博士の父・永井寛はここで学び、永井隆もここで生まれ、３歳まで暮らした。島根県の近代医学発祥の地であり、全国的にも最初期の病院建築。

61 **浅野小児科医院**　大正元年築の木造洋館。国登録文化財。

62 **筋違橋（すじかいばし）**　城下町の南西から侵入する敵が直進すると堀に落ちるように、わざと筋違いにして架けた橋。島根大学所蔵「松江城下町絵図（堀尾期）」（1620～1633製作）にもみえる。

以上に列挙した地域資源は、従来看過されてきたものも含まれているが、歴史的価値を再認識すべく改めて光をあてたものである。従来、松江城周辺においては主要観光施設を点的・線的にまわる観光に終始してきたきらいがあったが、網羅的・有機的に地域資源が分布することによって、面的にそぞろ歩いて散策する観光へと展開できることが期待できる。また、地元市民にとっても地域資源の再発見につながり、地域の身近な歴史・文化を継承していく意識啓発にも資するだろう。

4　今後の課題

もとより、こうした観光マップは、従来から部分的に制作されてきたものであり、その見せ方、内容について、既製マップとの差別化をいかにはかるかが課題となる。今回は、前記したように島根大学周辺の歴史・文化資源を網羅的に取り上げ、江戸時代初期（島根大学附属図書館所蔵「松江城下町絵図＜堀尾期＞」）、江戸時代後期（松江市所蔵「天保年間松江城下町絵図」）、昭和初期の地図（陸地測量部昭和11年発行地図）にもマッピングして、これらの資源が松江の街の歴史的変遷・文脈のなかで理解できるように工夫した。今後、活用の過程で、評価とフィードバックを行い、より工夫した案内マップへと改善を加えていきたい。

マップの活用方法については、地域の観光施設・公民館などに置いたり、大学の授業・公開講座などで配布したりするだけでは、その効果が限定的になることが予想される。島根大学では、早ければ平成21年度ないし22年度から、マップ上にも示されている松江市奥谷町の国登録文化財・島根大学旧奥谷宿舎（旧制松江高等学校外国人宿舎）を改修して、サテライトミュージアム・サテライト教室・市民や観光客が集う交流拠点として活用していく方針である。将来的に、こうしたコア施設を拠点に、例えばウォーキングツアーの実施など、マップを活用した様々な情報発信・普及啓発の取組みをおこない、一帯の「地域まるごとミュージアム」化を推進していければと考える。

さらに、次年度以降は、松江市他地区における同様の歴史・文化資源の再発掘とマップ制作、島根県や松江市などの行政や市民団体とも連携したマップ活用を図っていきたいと構想している。

注

(1) 携帯用マップ『松江温故知新・いにしえのまちめぐり（橋北版）』は、島根大学プロジェクト研究推進機構・萌芽研究部門「山陰地方における歴史・文化資源の発掘と活用に関する研究プロジェクト＜プロジェクトリーダー・田中則雄＞」の成果の一環である。なお、携帯電話版ホームページからも同様の内容を閲覧できる。ＵＲＬは、http://museum.shimane-u.ac.jp/m/matsueonkochishin_kyohoku.html。

主要参考文献

伊沢元美編　1968『島根文学地図（山陰文化シリーズ30）』松江今井書店

上山信一・稲葉郁子　2003『ミュージアムが都市を再生する　経営と評価の実践』日本経済新聞社

加藤有次ほか　2000『現代博物館論』雄山閣

島根県教育委員会　2002『島根県の近代化遺産　島根県近代化遺産（建造物等）総合調査報告書』

島根県文化財愛護協会　1999『島根県の文化財』

野田哲夫　2007「Information EconomyからParticipation Economyへ」第３回山陰地方における歴史・文化資源の発掘と活用に関する研究プロジェクト研究例会資料

松尾寿　1986『城下町を歩くⅠ（ふるさとブックレット山陰の自然と文化２）』たたら書房

松尾寿ほか　2005『島根県の歴史（県史32）』山川出版

道重哲男・相良英輔編　2005『出雲と石見銀山街道（街道の日本史38）』吉川弘文館

米田正治　1967『島根県医家列伝（山陰文化シリーズ41）』松江今井書店

若松秀俊　2007『四ツ手網の記憶　松江を愛したフリッツ・カルシュ』ワンライン

島根大学ミュージアム年報
平成19年度

発　行　2008年3月29日
発行者　島根大学ミュージアム
〒690－8504 松江市西川津町1060
電話（0852）32－6496
印　刷　株式会社 報　光　社